

第4章

キューバミサイル危機——威信、信頼性と権力

誰も撃つつもりがないなら、弾を込めたライフルを舞台の上に置くな。

アントン・シェコフ⁽¹⁾

われわれはフルシチョフの指を親指締め器に乗せていたあいだ、そのねじを毎日ひとひねりずつ締め上げるべきだったのだ。

ディーン・アチソン⁽²⁾

私の推測だが、**極限状態**では誰でも核兵器を使おうとするのではないだろうか。

ジョン・F・ケネディ⁽³⁾

中間議会選挙を二週間後に控えた一九六二年十月二日月曜日の晩、ケネディ大統領はホワイトハウスからアメリカ国民と世界に向かって、厳粛な重々しきで演説をおこなった。大統領は、キューバ上空でアメリカの偵察機が、ソ連によって「一連の攻撃用ミサイル基地」が「捕らわれの島」キューバに建設されつつあることを「確認した」と述べた。これらのミサイルはどれもが、「ワシントンDC、パナマ運河、ケープ・カナベラル、メキシコ市、その他アメリカの南東部、中央アメリカ、カリブ海地域のどの都市でも攻撃できる」能力を備えており、「アメリカも国際社会も、国の大小にかかわらずいかなる国によるものであれ、意図的なごまかしや攻撃的な威嚇を容認しないであろう」。ソ連のミサイル開発は「明らかな平和への脅威」であった。なぜなら、「不安定な現状を決して乱さない」ために米ソ両国が長年実践してきた「細心の配慮」の伝統を破るものであり、「アメリカとの特別かつ歴史的な関係でよく知られている地域で、共産主義者のミサイルが秘密裏に、迅速に増強されているというこの異例の事態は、われわれの勇気と誓約が信頼に足るものであるためには、容認するわけにはいかない」。かつて使ったことがないほど威嚇的なことばで、ケネディは警告した。「われわれは、勝利の果実さえ口にしようとたん灰と化してしまうような世界的な核戦争の危険を、不用意あるいは不必要に冒すことはしない。しかし同時に、必要とあればいかなる時にも、その危険に尻込みすることもないだろう」。

ケネディは聴衆に、海軍に対しキューバ周辺に限定的な「交通遮断」を実施するよう命じたと伝えた。米軍は増強され、「どんな不測の事態」にも対処できる。もしソ連がキューバに配備したミサイルを発射すれば、アメリカは報復するだろう⁽⁴⁾。

大統領は、南北アメリカにおけるアメリカの核戦力の優位と覇権——あの「特別な歴史的関係」——を維持するために、わが国が戦争の、おそらくは核による絶滅の瀬戸際にあるということ、確信していた。事実ではなかったが、一般の人々はこの危機によって一億八千万のアメリカ国民が焼け死ぬかもしれないと考えていた⁽⁵⁾。

何か月も、何年も、何十年も前に始まっていた超大国の対決は、大多数の人々が有効な手だてをとることができないまま、頂点に達した。ケネディがソ連にキューバからミサイルを撤去させ

るために「必要なことは何でもする」と脅迫した日から六日後の十月一八日の朝⁽⁶⁾、ソ連のニキータ・フルシチョフ首相は、ケネディの要求に応じると表明した。彼が提示した唯一の条件は、アメリカがキューバを侵略しないと確約することだった。フルシチョフの発表はまた、ケネディ政権の閣僚やアメリカ議会も含めほとんどの人にとって理解しがたいあいまいな外交用語ではあったが、第二の秘密の条件として、アメリカがトルコから核搭載のジュピターミサイルを撤去することを示唆していた。

米ソは、フルシチョフがワシントンの圧倒的な軍事力の前に屈辱的な方向転換をするときまで、不均等な核威嚇の「にらみ合い」の状態にあった。ふたつの超大国はまさに、核戦争の一步手前にあり、対決が最高潮に達したとき、ケネディはアメリカが核戦争を始める確立は「三分の一から二分の一」と考えていた⁽⁷⁾。当時の国務長官ディーン・ラスクは広島と長崎への原爆投下を見落としたらしく、ミサイル危機は「歴史上われわれがもっとも核戦争に近づいた瞬間だった」と後に述べた⁽⁸⁾。同じ懸念は、アメリカ、ソ連、キューバ、日本はじめ世界の多くの国々の一般国民の有形無形の不安にも示されていた。キューバの作家、エドムンド・デスノエスはそれを、自分たちは「一卷の終わり」になることを恐れていたと、簡潔に表現した⁽⁹⁾。

ケネディ政権のキューバミサイル危機への対応は、大統領と国家にとって大きな外交的、政治的勝利としてただちに国中の喝采を浴びた。それは華麗なケネディ神話に欠かせないものになった。危機は、ベルリン、トルコ、アジアに波及しなかった。ケネディと彼の顧問たちは何も譲歩することなく、ソ連を撤退させたと広く信じられ、ケネディの上級顧問たちは自分たちが核の力による「強制的な外交」の実践を習得したと信じた。こうしてキューバミサイル危機は、ケネディとジョンソン大統領のベトナム戦争の破滅的拡大に道を開いたのである⁽¹⁰⁾。

十年後、マクナマラがかなり以前から不可避であると予見していたように、ソ連はついにおよその核戦力の均衡を達成した。しかしこのとき、一九六二年当時のアメリカの政策決定者の狂気について公然と非難する人は、ほとんどいなかった。国のプライドと威信とともに、ケネディ大統領の政治生命は、マクナマラが最初の一時間で二億人を殺戮するだろうと予測した熱核兵器による交戦の危険を冒し、すでに破滅的な核軍拡競争の激化に道を開いた上で保たれていたのだが⁽¹¹⁾。歴史的な視点から見れば、アメリカの「ベスト・アンド・ブライテスト——最高でもっとも頭脳明晰な」指導者と彼らほどではないにせよソ連とキューバの指導者らの向こう見ずな核テロリズムは、核戦争への準備とそれへの威嚇にもとづく「安全保障」に内在するイデオロギー的狂気と「合理性」の狂気を浮き彫りにした。

キューバミサイル危機は、米ソ冷戦対立に加えてアメリカの植民地主義と新植民地主義から生まれたものであるため、この章は、アメリカとキューバの「特別な関係」を振り返ることから始まる。キューバ革命政権が最初にモンロー・ドクトリンの中で想定されていたアメリカによるラテンアメリカ支配を脅かすのではないかとアイゼンハワーとケネディの怖れと、そしてジョンとロバートのケネディ兄弟がいかにかにフィデル・カストロの転覆に取りつかれていたかを説明する。後のページで説明されているように、アメリカ全土を標的にできる弾道ミサイルを秘密裏にキューバに配備するというフルシチョフの作戦は、包囲されていたキューバ革命を防衛すると同時に、ソ連が置かれていた核テロの屈辱的な不均衡状態を克服することをねらったものであった。

この章では続いて、ケネディ、顧問、補佐官たちがいかにして、アメリカ政府が「攻撃すると

決めた」人々を脅迫するためにアメリカの核兵器を利用するという古典的なやり方で、五億人以上の命を奪うことができるホロコーストを招く危険を冒したかという、大破壊につながりかねない事例を示す⁽¹²⁾。キューバミサイル危機はアメリカの大きな勝利であったという一般的な理解に反して、ケネディと彼の顧問たちが破局をもたらす核戦争の危険を冒した目的は、アメリカの威信を守り、彼らの核の優位をせいぜい十年ほど長く保ち、大統領の弾劾の可能性を回避し、敵の周囲に核兵器を——旧式のものであっても——配備できるのは、アメリカであってソ連ではないのだという原則を実行することだったのである。

キューバミサイル危機はほかにも、憂慮すべき真実を浮き彫りにしているが、この章ではそれについても解明している。ケネディ大統領と当時の国務長官は、軍を完全にコントロールできていなかった。危機が最高潮に達したとき、ケネディは、ソ連が四十八時間以内に撤退しなければキューバに侵攻するという統合参謀本部の要求に屈した。ある上級司令官は、自らの権限で核兵器警報のレベルを引き上げた。そして、国防長官の命令に違反して、海軍は核戦争開始数秒前の状態に突入した。同様に、キューバミサイル危機の数年後、ケネディ政権の生き残りの指導者と学者たちは、フルシチョフがキューバに派遣していた現場の司令官に戦術核兵器使用の権限を与えていたという衝撃的な事実を知った。その権限委譲が計画されていたアメリカの侵攻前夜に有効であったのかをめぐる激しい議論が、いまでも続いている。最後に、きわめて憂慮すべきことだが、ミサイル危機の最終局面でカストロが、ヤンキー帝国主義者を崩壊させるためにソ連の核兵器を使うよう、フルシチョフに迫ったという事実がある。

特別な歴史的関係

一九六〇年の秋、元駐キューバ米国大使アール・E・T・スミスは、アメリカとキューバ両国関係の二十世紀の歴史を、およそ外交官にふさわしくない言葉で表現した。「カストロが現れる前まで、アメリカはキューバにたいし圧倒的な影響力を持っていた…アメリカ大使はキューバでは二番目の有力者であり、時には(キューバの)大統領よりも大きな権限を持つことさえあった」⁽¹³⁾。ジャーナリストのタッド・シュルツは、もっとストレートに、一九〇二年にその「独立」を認められて以来、キューバは主権国家というよりむしろ「アメリカの従属国」と書いている⁽¹⁴⁾。

アメリカは、米西戦争よりはるか前に、「自明の運命」〔訳注—アメリカ合衆国は北米全体を支配する運命をになっているという理論〕にもとづく領土拡張政策と戦略地政学的な思惑から、フロリダの南九十マイルにある肥沃な島に、野望の矛先を向けた。キューバの港は、アメリカのカリブ海支配に役立つことも、脅威となることもあり得たからである。一八二三年、ジョン・クインシー・アダムズ国務長官は、キューバは「われわれの連邦の政治的かつ商業的利益にとって、なにものにも優る重要な目標になった」と述べた。彼は「キューバをわれわれの連邦共和国に併合することは、連邦そのものの存続と統合にとって不可欠であるという確信に逆らうのは不可能に近い」とまでいっている⁽¹⁵⁾

当時キューバはスペインの植民地だった。スペイン帝国主義は勢力を失っていたが、国務長官アダムズの野望と、彼が仕えていた大統領(ジェームズ・モンロー)、そしてキューバ併合の間に

は激しい政治的対立があった。キューバは世界のどの国よりも自由な国民一人あたりの奴隷の数が多かったため、アメリカ国内では、新しく併合される領土が「奴隷」州としてか、それとも「自由」州として連邦に加わるかを定める議論がこう着状態に陥った。そのため、北部州選出の議員たちはキューバの早急な併合に反対した。キューバ併合のための時間稼ぎという政治的必要性もあって、モンローは今日でもその名が聞かれている外交政策を発表した。西半球はすべて、アメリカの支配圏にあるというものである。ヨーロッパ諸国、特にイギリスとフランスは、この地域におけるアメリカの支配（または野望）に異議を唱えてはならないとの警告を受けたのだ⁽¹⁶⁾。

政治的な勢力伸張や象徴的統合には、公的な制裁は必ずしも必要ではない。長いこと押さえ込まれていたスペインからの独立をめざすキューバ革命に再び火がつく一八九五年までに、アメリカの企業や銀行はすでに、キューバの砂糖農場、鉱山など十九世紀後半当時の金額で推定三千万ドルにのぼる資源を握っていた⁽¹⁷⁾。革命が起ると、スペイン国王は断固とした行動をとり、キューバ国民を残忍に弾圧し、何十万というキューバ人を強制収容所に送り込んだ。膨大な数のキューバ人が、拷問や放置、飢餓、疫病により収容所で死んだ。アメリカ本土では、「イエロー新聞」（訳注—ゴシップやスキャンダル専門紙）がスペインによる残虐行為のもっとも悲惨な事例を競って報道し、アメリカ在住のキューバの民族主義者への支援を呼びかけた。しかし、クリブランド大統領は中立を選んだため、スペインは引き続きキューバにおけるアメリカの財産を保護しなければならなくなった⁽¹⁸⁾。

ブッシュとクリントン両大統領が、イラク、ユーゴスラビアおよびアフガニスタンでの戦争に国民の支持をとりつけるために、「人道的介入」という美辞麗句を使ったのと同じように、「米西」という誤った名をつけられた戦争がたたかわれた表向きの名目は、人間の苦しみを取り除くことであった。今日のニューイングランド地域で、慎重にものごとを見る人々であれば、戦争への国民の支持を動員するために使われるイデオロギー的根拠とレトリックを垣間見ることができる。メイン号の爆沈への報復以外に戦争の理由とされたものが、地域中の町の広場や公園にあるほとんど瓜二つの記念碑に見て取れる。コンクリートの台座の上に、胴にライフル銃を抱えた農民兵士がひとり立っている。その下にある飾り板には、海岸にひざまずき、外国の助けをもとめて両手を差し伸べている死に物狂いの女性の姿が描かれている。彼女の後ろでは、湾の向こうに停泊している船から救援のためにアメリカの兵士や水兵が上陸している。「キューバ」「プエルトリコ」、そして「フィリピン」という単語は米軍に「救われた」国々の名前として刻まれたものだ。

一八九〇年代に絶望していたのは、スペインの農民や反体制派だけではなく。アメリカは、深刻な経済不況にみまわれていた。農場で、鉱山地区や都市で、人々は失業し、家を失い、飢え、暴動を起こしかねない状態だった。一八七〇年代の不況以降、ラテンアメリカや中国の市場への進出と輸出が、景気回復の数少ない手段のひとつだと考えられていた⁽¹⁹⁾。その農業資源や市場に加えて、キューバやプエルトリコの港は、カリブ海地域におけるアメリカの軍事的優位を保障するものであった。五千マイルかなたのフィリピンのスービック湾は、中国の市場へのなくてはならない足がかりとみなされていた。

一八九八年一月、明らかにキューバ全土で再燃したたたかいに反撃するために、「アメリカの懸念の目に見える表現」として海軍の巡洋艦メイン号がハバナに派遣された。数日のうちに、メイン号はいまだに所属不明の勢力の破壊攻撃の犠牲になった。破壊工作の実行者の正体を突き止め

ることはできなかったが、多くのアメリカ人の命を奪ったメイン号の沈没は、国内の戦争熱に油を注いだ。マッキンレー大統領は、スペインへの宣戦布告でこの事態にこたえた。大統領は自分の目的は、キューバでの「残虐行為、流血、飢餓、悲惨な状況に終止符を打ち」、「アメリカ国民の商業、貿易、ビジネスに与える非常に深刻な損害と不当な資産破壊や島の荒廃」および混乱による「莫大な損害」を正すことだと述べた。注目すべきは、彼がキューバの民族主義者と彼らの独立へのたたかいにひとことも言及しなかったことである。米西戦争の銃声がようやく止んだとき、数十万人が死に、アメリカはキューバ、プエルトリコ、フィリピン、そして中国へのもうひとつの最後の足がかりであるグアムを征服し、占領し、植民地化していた。

アメリカは、キューバから抑圧者スペインを追い出すだけでは満足しなかった。アメリカが後押ししたキューバ政府がプラット修正条項を受け入れる一九〇二年まで、占領部隊が居座った。この条項〔訳注—アメリカ議会がキューバの新憲法に入れるよう要求したもの。プラットは提案した上院議員の名前〕はアメリカの法律で、キューバの主権を事実上除外し、この島をアメリカの経済的には植民地に、政治的には保護国にかえるものだった⁽²⁰⁾。プラット修正条項によってアメリカは、「キューバの独立を守り、生命、財産、個人の自由を守ることができる政府を維持するために介入する」権利を手に入れ、キューバは「燃料補給地と海軍基地のために必要な土地をアメリカに譲渡または貸与する」ことが義務付けられた⁽²¹⁾。その後の六十年間、歴代のアメリカ政府は「キューバの独立の維持」、「生命の保護」、「個人の自由」がアメリカの政策の優先事項ではないことを示した。

こうして、いまや「敵戦闘員」にたいするアメリカの拷問でもっともよくその名を知られている、グアantanamoのアメリカ海軍基地が確保された。アメリカの要員は、キューバの税金、金融、公共土木工事などに関する記録にある経済的、政治的、個人的機密事項を定期的に入手できるようになった。アメリカ大使が任命されたのは、「キューバにおけるアメリカの投資を保護するために必要不可欠」であったためである⁽²²⁾。プラット修正条項が繰り返されるアメリカの軍事介入に法的根拠を与えていた一方で、一九〇五年、セオドア・ルーズベルトはモンロー主義の当然の帰結によって、イデオロギ的基礎を構築した。それは、「文明社会の結合を相対的に弱める結果となるような誤った行為や能力の欠如があった場合、米州においては最終的には文明国の介入を必要とする」というものだった。誤った行為を正す「文明」国とは、もちろんアメリカ合衆国であった⁽²³⁾。

モーリス・ザイツリンが文書に残しているように、「その後の二十五年間、少なくとも5回の革命の企てが、アメリカ海兵隊のプレゼンスによって弾圧されたり、影響を受けたりした」。このほか、本国政府やアメリカ大使からの数え切れないほどの警告も、同じような影響力をもっていた⁽²⁴⁾。この砲艦外交の伝統の最後のあがきがおこなわれたのは、フランクリン・ルーズベルト政権の初期のことであった。ラモン・グラウ・サン・マルティン政府はキューバの債務を再構成し、アメリカ企業のキューバの労働力と資源を搾取する自由を制限する内容の経済改革案を提案していたが、アメリカ政府はそれを容認する気はなかった。グラウ政権は外交と軍事両面からの工作によって、転覆された。

征服、介入、帝国支配の百年を経て一九三〇年代には、「モンロー湖」(カリブ海)とその周辺が征圧されていた。アメリカは西半球の支配を確立し、ルーズベルトはいかなる国も他国の問題

に介入する権利を明確に否定した「善隣」政策によって、爆発寸前の反米感情を巧妙に押さえこんだ。ラテンアメリカ全土でのアメリカの経済的影響力、軍事基地、せっせと集められた忠実なエリートたちのことを考えれば、この善隣政策は見た目ほどたいしたものではなかった。

プラット修正条項は一九三四年に最終的に廃止されたが、アメリカ海軍へのグアンタナモ湾の貸与は永久にそうはならなかった。キューバに軍事基地を置き、経済を支配し、忠実な独裁者と強権を持つ駐キューバ大使などを使って、アメリカはキューバ社会のほぼすべての分野に多大な影響力を与え続けた⁽²⁵⁾。

キューバ政府におけるアメリカ政府とウォール街の最後の野蛮な手先となったのは、独裁者フルヘンシオ・バチスタであった。軍曹だったバチスタは議員を使ってキューバを支配しつつ、軍の中で権力基盤を固めていった。一九三六年、かつての同盟者ミゲル・ゴメス大統領を追放したバチスタは、アメリカの支持を得て、その後二十二年間にわたってキューバを恐怖政治で支配した。バチスタは、典型的なバナナ共和国の独裁者ではなかった。南北アメリカにおいて、時代を先取りする人物であった彼は、「二十世紀の洗練された全体主義」手法を心得ていて、労働組合や大学、マスコミを厳しく取り締まった。彼の政権は、植民地独立後のカウディーヨ的軍事独裁者の伝統よりむしろ、スペインやイタリアのファシズム、一九七〇年代と八〇年代の南米の軍事独裁政権に多くの点で似ていた。バチスタの権力維持のために、何千ものキューバ人が殺され、拷問され、あるいは不具にされた。バチスタがキューバ革命によって最終的に追放される一九五八年までに、彼の政権によってキューバ人口七百万人のうち二万人が殺されたと推定されている⁽²⁶⁾。

フィデル・カストロは決して「ハバナにいるわれわれの男」ではなかった。アメリカでは、カストロをはじめとするキューバの革命家たちはバチスタの抑圧政治にかわる民主政治の代表者と広く考えられていたが、アイゼンハワー大統領は勝利したゲリラ部隊がハバナ入りする六カ月前の一九五八年春まで、バチスタと彼の軍隊に武器を供与していた。したがって、政権の座に就いたカストロが、アイゼンハワーは必ず時計の針を戻そうとすると確信していたことは、理解できる。彼は「海兵隊を送り込めば、何千という海兵隊員が海岸で死ぬことになるだろう」と警告した⁽²⁷⁾。

カストロの経済政策はまもなく、ワシントンとの関係を悪化させた。推定価値一億ドルの砂糖農場、精油工場はじめタバコ、観光、不動産などアメリカがキューバで所有する資産を国有化したからである。カストロは識字運動を開始し、大衆を武装し、医者を用いて人々に奉仕させ、「寡頭政治をなくしブルジョアを抑えた」⁽²⁸⁾。バチスタに忠誠を誓った者の多くがただちに裁判にかけられ、公開処刑された。一九六〇年一月十九日、カストロによってキューバは、亀裂が深まりつつあった中・ソブロックと正式に同盟を結んだ。

アイゼンハワーは、ハバナとの外交関係を断絶し限定的な経済制裁をもってこれにこたえた。ケネディ新政権はすばやく圧力を強めた。キューバの最も重要な市場へのアクセスを奪うためにキューバへの砂糖輸入割り当てを撤廃し、一方的に対立をエスカレートさせた。そしてCIAと前政権の圧力に屈して、自滅的なピッグズ湾からのキューバ侵攻を承認したのである⁽²⁹⁾。この侵攻の失敗の責任の所在を追及されると、大統領はCIAを、CIAは統合参謀本部を責め、統合参謀本部は大統領を責めた。

永続する恐怖の不均衡

キューバミサイル危機とその後の数十年の間、大部分の米国民は、ほぼ同等の戦力を持つ二つの核保有国が対立していたのだと信じていた。同時に、彼らは自分たちおよび全人類が、全面殺りくの核戦争で死ぬ危険にさらされているという恐怖を感じていた。何億人もの命が危機にさらされていたが、その大半はロシア人、ヨーロッパ人、そしてキューバ人だった。フルシチョフをキューバへの核ミサイル配備へと突き進ませた最大の要因は、フルシチョフ自身とソ連の軍指導部の多くがアメリカの先制攻撃に対する自分たちの脆弱性を感じ、死に物狂いになっていたことである。危機の間、米ソの核戦力の不均衡は、アイゼンハワー前大統領がソ連の指導者は「死ぬほどこわがるべきだ」と言い、再度アメリカによるキューバ侵攻を提案するほど、大きなものだった⁽³⁰⁾。

ソ連はいっそう強力な原子および水素爆弾の実験をおこなってアメリカと世界世論を威嚇しようとしたが、一九五五年以前は、スターリンもその後継者も、アメリカを首尾よく攻撃する能力があると見せかけることはできなかった。モスクワの核のポチョムキン村〔訳注―帝政ロシアの時代、女帝エカテリーナ二世が国内視察を行った際に、総督ポチョムキンが先回りして貧しい農奴の暮らしを隠すためにはりぼての美しい視察用の村をつくり出迎えたという逸話から〕はソ連国内の批判者をなだめ、アメリカ国防総省を保有核兵器の増強へと駆り立てたに過ぎなかった。アメリカは初めてポラリス潜水艦に核ミサイルを配備した一九六〇年までに、ソ連を壊滅させることができる一七三五機の戦略爆撃機を保有していた。数の点からだけ見るならば、アメリカのソ連に対する核の優位は十七対一だった⁽³¹⁾。これは、力の不均衡を控えめに表したもので、アメリカはソ連に対し完全に戦意消失させることが可能な核先制攻撃を行う能力があると主張する、多くのアメリカの指導者の陶醉状態を見えなくするものである。歴史家ポール・ケネディは、米ソの軍事力の差は「全射撃能力、兵力、通常兵力の動員力、多様性、致死力、戦略兵器システムの精度」の点からみて、一九五〇年代なかばには四十対一、両国が軍事増強をはかった十年後にはほぼ十対一であると書いている。ケネディは「この差は」、十七世紀に近代国家システムが成立して以降、「最強の国とその最強のライバルないしライバル集団との間での、いかなる比較をもはるかにしのぐほど大きい」と説明している⁽³²⁾。

アメリカ政府の「ミサイルギャップ」や「崩れるドミノ」というレトリックをよそに、アメリカの支配層はその劇的な軍事優位性を認識していた。一九五五年の国家情報評価は、ソ連政府の融和的アプローチは、「現在アメリカの核能力がソ連のそれを大きく上回っているという事実を自覚している」ためであり、「このギャップが存在する限り、ソ連指導部が全面戦争の危険を最小限におさえたいと願うことはほぼ間違いない」と報告している。一九五八年にU2偵察機によって、ソ連政府がまだ大陸間弾道ミサイル（ICBM）の配備地をもっていないことが確認された後、アイゼンハワーはそれについて、当時の上院多数党院内総務リンドン・ジョンソンに、より生々しい表現で説明している。「もしわれわれが保有する核兵器をソ連に対し使用するとした場合、最大の危険は報復ではなく地上の大気中に降る放射性下降物によるものになるだろう」⁽³³⁾。

一九六二年のキューバ危機までに、ソ連は理論的にはアメリカに到達可能な原始的な大陸間弾道ミサイルを二十基ほどもっていた可能性があるが、腐食を防ぐために燃料タンクは空のままだ

ったため、発射のための燃料補給に数時間必要だった。中国の万里の長城の見張り番のように、ミサイルの誘導システムは飛行経路に沿って三百マイルごとに信号施設が必要な上、ソ連軍はアメリカの標的の位置について限られた情報しかもっていなかった。これにたいしアメリカは、大陸間弾道ミサイル二八四基、核搭載可能な爆撃機二千機をもち、「ソ連の全地上配備の戦略兵力をアメリカの先制攻撃にたいし極めて脆弱にし」、ソ連全土を「対価値」壊滅（すなわち、ソ連の都市とその住民を破壊すること）にたいして無防備にしていた。あるソ連のミサイル設計者は、ソ連政府が報復攻撃をする前に「何も残されていないだろう」と不平をもらしている⁽³⁴⁾。

ソ連の将軍や献身的共産主義革命家たちにとって、朝鮮戦争でも、台湾危機でも、そしてベトナムでアメリカが戦争を拡大していく最初の時期にも、まるで資本主義者に頭を下げているかのように傍観していることは、とてもむずかしいことだった。しかし一九五〇年代を通して、フルシチョフは「ちょっとした帝国主義戦争が世界核戦争に発展しかねない」と警告し、共産軍に戦争に訴えないようにもとめ、断固として譲らなかった。一九五八年、エジプトの指導者ガマル・アブデル・ナセルが、ベイルートに海兵隊が上陸したことに対しアメリカを威嚇すべきだとソ連政府に迫ったとき、フルシチョフは「われわれは第三次世界大戦をするつもりはない」と拒否した。一年後、イラクの軍指導者アブドゥル・カリム・カセムが権力奪取に失敗し共産主義者数百人を殺害したときも、ソ連政府は傍観していた。

ベトナムからキューバまで共産主義者をおさえたフルシチョフは、イラクの災難は「条件が成熟しない段階での社会主義的変革の時期尚早のスローガン」によるものだと警告した⁽³⁵⁾。一九六二年、フルシチョフはアナトリー・ドブリニンを駐米大使に任命し、「アメリカとの戦争は認めないーこれが最優先事項である」と命じた⁽³⁶⁾。

ケネディ政権の事情

詩人の想像力は集団の無意識を映し出すとともに、現実を照らし出すことがある。ケネディが大統領になって「最初の一時間」におこなわれた就任式で、著名な詩人ロバート・フロストが就任を祝して読んだ詩は、若い大統領の人間性と彼に対する国民の大きな期待の両方を反映していた。

来るべき大いなる時代の栄光は
その強さとプライドが生み出す権力と
試練を待ち望む若き野心のもの⁽³⁷⁾

これらの言葉で、老いた詩人は、この後キューバミサイル危機とインドシナ戦争の破局的拡大への道を開くことになる帝国の傲慢さ、軍国主義、思い上がりや未熟さを予見したのである。

ジョン・F・ケネディと彼を取り巻く東海岸の意欲満々の学者集団は、アイゼンハワー時代からの世代交代を印象付けたが、彼らの台頭は、国民に喧伝されたような過去との完全な決別ではなかった。ケネディは長い間、民主党の両翼に二股をかけていた。一方は二度大統領選で敗北したアドレイ・スティーブソンに忠実なりベラル派、もう一方はトルーマンの冷戦対決を中心とする対外政策を考案し実行した、ディーン・アチソンを取り巻く強硬派である。政権に就いたとき

のケネディを、デービッド・ハルバースタムは的確に描写している。「当時の政界において誰もがそうであったように、彼もまた強硬派の要素を持っていた。クールで実用主義の同時代人の典型であった彼は、空想的な社会改良を示す鈍重なタイプよりも、老練で抜け目なく、冷笑的な体制派人種に敬服していた」。ケネディは政権内で苦勞をともにしたアチソン、マクロイ、ハリマンなど体制派の初老の「賢明な男たち」の「根性とタフさ」を称賛した⁽³⁸⁾。

英雄的気質、若さ、野望といった一般的なケネディのイメージの底流には、太陽に近づきすぎた神話のイカロスのような危険で悲劇的な流れがあった。彼の前にはフランクリン・ルーズベルトがそうであったように、ケネディは自分の健康上の問題、慢性的な痛み、そして今や悪名高き数々の女性関係を必死になって隠した⁽³⁹⁾。そして、彼の前任者たち同様、ケネディも政治的出世のために大衆を扇動し、国民の恐怖心をあおり、現実を歪曲した。大統領史に詳しいマイケル・ベシュロスは、的確に書いている。「ジョン・F・ケネディほど票をだましとるために危険を冒した候補者はいない。彼は、自らの大統領職の最大の危機への種を蒔いてしまったのだ」。ケネディは、アメリカがカストロ追放をめざす「自由の戦士」を支援すべきだと強く主張した。そして、アイゼンハワーにたいして、ありもしないソ連有利とのミサイルギャップ論の台頭を許し、ソ連にアメリカの安全を脅かすがままにさせたと誤った非難をおこない、「墓穴を掘ってしまった」⁽⁴⁰⁾。

実際に、選挙期間中とその後の国防総省とCIAの説明では、深刻なミサイルギャップが存在するとはっきり述べていたが、それはアメリカ有利というものだった。ケネディ政権発足から十カ月後、ロスウェル・ギルパトリック国防次官がアメリカは「それを招いた敵の動きが自滅行為になるほどの破壊力の核報復戦力をもっている」と述べて、本当のミサイルギャップについて説明した⁽⁴¹⁾。アメリカの公式推計では、ソ連が保有するICBMは「五十基に満たない」こと、一方アメリカはICBM一八五基と三千四百発を超える到達可能な核爆弾を保有していた。一九六一年国家情報評価は、「五十未満」というのは外交表現で、実際の数は「四」であるとしている⁽⁴²⁾。

しかし、選挙運動のなかで国民の間に恐怖をあおっていたケネディは、一方的に核軍拡競争を加速させる政治的必要があることに気づいた。就任後数カ月で、彼は軍事費十五パーセント増を勝ち取り、核搭載可能なミサイルの生産の速度をあげ、対ゲリラ戦争の訓練を陸軍と海兵隊の優先課題とした⁽⁴³⁾。これがアメリカの核先制攻撃にたいするソ連の不安をあおり、フルシチョフのキューバへの核ミサイル配備という決定につながった。

ケネディの周りを固めていたのは、ほとんどが「実利的合理主義者」と自称する若い人々だった。マクジョージ・バンディは「超現実主義」に傾倒するハーバード大学の政治学部長だった。政府内の多くの人間と同様、バンディも第二次大戦中、上級の政策立案者のもとではたらいていたが、同僚と違い、広島と長崎への原爆投下決定に中心的役割を果たした陸軍長官ヘンリー・L・スティムソンの崇拜者であり、弁護者であり、協力者であった。日本の都市への空爆が行われていたとき、カーティス・ルメイ将軍の部下だったロバート・マクナマラは、ミシガン州のフォード社からもうけ第一のシステム分析理論を国防総省と閣議に持ち込んだ。朝鮮半島を分断する線を引き、國務次官として日米相互安全保障条約の細かい点について交渉したディーン・ラスクは、今度は長官として國務省に戻っていた。退役将軍のマクスウェル・テイラーはベストセラーとなった著書「遠方のラップ」のなかで、ゲリラ地上部隊を中心として限定または全面核戦争の威嚇で補強された新しい戦略理論を主張していた。テイラーは、ピッグズ湾侵攻の大失敗のあと、ケネ

ディの「軍事顧問」として側近に加わったが、まもなく統合参謀本部長に抜擢された。大統領の弟で、正式には司法長官、非公式には首相としての任務を果たしたロバート・ケネディは、ジョー・マッカーシー上院議員のスタッフとして政治的経験を積んでいた⁽⁴⁴⁾。

ケネディが大統領になってから数年間の米ソ関係の特徴は、激しい対立、恐怖、誤算であった。ケネディの顧問たちでさえ、中ソ間に亀裂が生まれていることに目を奪われ、それがアメリカの影響力を高める貴重な機会をもたらすと思い込んでしまったため⁽⁴⁵⁾、ベルリンや東南アジアをはじめとする第三世界、宇宙、そして核技術の分野で優位に立つことをめざすフルシチョフから、ひっきりなしにあざけりを受けたり策を弄されたりすることになった。フルシチョフは核技術については、アメリカに「優るとまではいかなくとも同等」であると豪語していた。国民やケネディの顧問団の多くの目には、ソ連が台頭する第三世界のみずぼらしい国々と手を結ぶことで攻勢に出て、キューバをはじめラテンアメリカでのアメリカの伝統的優位に挑戦しようとしているように見えた⁽⁴⁶⁾。

ケネディと彼の側近たちは力はあったが、不安定で融通がきかなかった。ソ連の反体制派の歴史家ロイ・メドベージェフは優れた洞察力で次のように書いている。

キューバでのクーデターの失敗は、ラオスの親米右翼勢力の敗北と時を同じくしていた。ゴ・ジン・ジェム親米政権も、南ベトナムで政権を維持するのが困難になっていた。特に中東やアフリカで形成が逆転していたときだったので、これらの屈辱にアメリカ政府指導部は神経をすり減らした。アメリカの政治家はこのような後退には慣れておらず、退却する覚悟も、国際政治に及ぼすアメリカの影響力が低下するという展望を受け入れる覚悟もできていなかった⁽⁴⁷⁾。

一九六一年六月ウィーンでの首脳会談で、フルシチョフはケネディを「経験不足の若い指導者」で、いじめや恫喝や脅迫のきく人間だと判断した⁽⁴⁸⁾。また、アメリカ政府はピッグズ湾侵攻での「敗北からなんらかの教訓を学んだ」が、「再び侵略のチャンスは逃すことはない」とふんでいた⁽⁴⁹⁾。フルシチョフのケネディへの見方には一定の真実があるが、同時に危険な判断違いもあり、そのことをソ連幹部会でのもっとも近い同僚はわかっていなかった⁽⁵⁰⁾。

ヘンリー・キッシンジャー、マックスウェル・テイラー、そして当時無名だった国防総省顧問ダニエル・エルズバーグの思考に影響を受けたケネディ政権は、アイゼンハワーとダレスの「大量報復」主義を放棄した。アイゼンハワー政権の末期、この軍事ドクトリンは信頼性を失いつつあった。10年前から核兵器の蓄積を始めていたソ連は、アメリカの第一撃への報復攻撃能力を有していると一般的に考えられていた。政治家、一般国民および戦略分析家らは、アメリカの権力と影響力に「通常」兵器で対抗しようとする試みすべてにたいし核先制攻撃に頼ることの均衡性、危険性および信頼性に疑問を呈した。グアテマラ、金門・馬祖、ラオスは、核戦争による破滅に値するのだろうか。あるいは、よほどの緊急事態は別として、アメリカが核戦争を引き起こしてのけ者のレッテルをはられることになっても、あえてそれをおこなう価値があるのだろうか。しかし、後にエルズバーグが書いているように、ケネディとその後継者たちは「(核兵器使用の) 威嚇は過去にうまくいったし、現在もううまくいっていると考えていた。だからこそ、彼らは威嚇をくりかえし、また将来おこなう予定の威嚇の信頼性と効果を維持・強化するために、先制使用および

第一撃用核兵器システムを買い込んでいたのだ」⁽⁵¹⁾。

「大量報復」主義への批判にたいし、ケネディはマックスウェル・テイラーの「柔軟対応」論をもってこたえた。これは、限定核戦争の脅迫をおこなう、あるいは必要なら実際に戦うというヘンリー・キッシンジャーの主張と、対ゲリラ活動戦力と陸上戦力へと重点を移すべきだという要求を結合したものだ。ケネディの先鋭兵器態勢は、「エスカレーション支配」論と、理論上戦争拡大のあらゆる段階でソ連（またはその他の敵）に勝利する切り札になり得る多様化された核兵器によって補強された、歩兵部隊「グリーンベレー」であった。

ケネディがアメリカの先制攻撃能力とエスカレーション支配に自信を持っていたのには、理由があった。一九六一年七月、ケネディが「非常事態計画にとどまらないものにみえる」ソ連への先制攻撃の提案について報告を受けたのと同じ月、CIAはモスクワのスパイ、オレグ・ペニコフスキーからの報告を大統領に提出した。報告は、ソ連が事実上ミサイルを一基もつくっておらず、フルシチョフはソ連が戦争への準備があることを示唆しているのははったりだということを確認するものだった。ケネディの戦略兵器顧問カール・ケイセンも、ソ連の戦略兵力を「無力にする第一撃攻撃」を実行することができ、高度の確信をもってそれらをすべて地上で破壊できると、大統領に報告した。この報告は、「ソ連のICBMシステム全体が突然時代遅れになった」ことを示した⁽⁵³⁾。

ケネディの「柔軟対応」ドクトリンは、ソ連の指導者およびその他の潜在的な敵が理性的であるとの信念を前提としていた。敵は自殺を選ぶより、アメリカとの対戦から引き下がるから、そうならば国防総省の「通常」地上戦力を展開する余地が開かれるというものである。しかし、このシステムが試されたとしても、ケネディの分身、セオドア・ソレンセンが説明したように、「ジョン・ケネディは依然として、核戦争という究極の危機に直面することを望んでいた。彼はその危機からしり込みすることもなかったが、慌ててそれに飛びつくこともしなかった」⁽⁵⁴⁾。とはいえ、キューバミサイル危機とベトナム戦争拡大への圧力に直面したとき、ケネディはアメリカの圧倒的な核の優位にもかかわらず、核戦争の威嚇、あるいは開始について統合参謀本部はもちろん閣僚の誰よりも慎重だった。ケネディは適切にも、アメリカとソ連双方の無分別を恐れていたのである。

就任一年後、マクナマラ国防長官は核戦争のための単一統合作戦計画（SIOOP）の修正をおこなった。アメリカの戦争計画は、ソ連、中国、アルバニアの都市を標的にするだけでなく⁽⁵⁶⁾、「ソ連のミサイル、爆撃機基地、潜水艦の補給船、防空組織、管制システム」の壊滅をもとめた。柔軟対応にしたがって、マクナマラは、限定核戦争で核兵器を使用できること、そしてアメリカは「有利な条件で戦争を終結させる立場にいないなければならない」と考えていた。これは可能だと確信していたマクナマラは、議会に、ソ連の全核兵器庫は「攻撃に対し無防備である」と報告した。国防総省が後に結論したように、「キューバミサイル危機の時点で」、アメリカの第一撃へのソ連の対応能力はあやしいものだった。「一九六二年のソ連の戦略状況は、絶望的の一步手前とみなせる程度であったかもしれない」⁽⁵⁷⁾。

若さからくる力とエネルギーと経験不足のため、ケネディと側近の多くは、自分たちの雄弁と行動力にソ連が恐怖を感じていることに気づかなかった。外交的な成功をおさめ、大言壮語をはいっていたフルシチョフであったが、ソ連の軍事力の脆弱さと限界を深く自覚していた。マックス・

フランケルが観察したように、フルシチョフは「深い劣等感をもち、ソ連邦を構成する諸国の『団結』のもろさを自覚して統治していた。彼はドイツの復活を恐れていた。そして、資本主義者は略奪者だという見方にずっとしばられていた」。一九六一年のウィーン首脳会談はじめあらゆる場でのフルシチョフの攻撃的で敵対的な外交のおもな目的は、ソ連の劣勢を隠し、アメリカを守勢に立たせることだった⁽⁵⁸⁾。

フルシチョフは、アメリカの新政権が核弾頭とミサイル生産を急いでいることに懸念を抱いた。アメリカがトルコ、イタリア、海上のポラリス原潜に核兵器を搭載したジュピターミサイルを配備してソ連を包囲していることに、憤慨していた。ビッグズ湾侵攻の失敗のあと、フルシチョフは「アメリカがカストロ政権のキューバと和解することはない」と確信していた⁽⁵⁹⁾。同時に、ソ連がベルリン問題での対立を解決するために軍事的手段に訴えれば、「われわれは先手を打たなければならないかもしれない」とのケネディの警告を無視することはできなかった⁽⁶⁰⁾。ケネディは、核攻撃の脅迫をしていた。なによりもこのことが、フルシチョフを恐怖の不均衡をなくすためにキューバにミサイルを配備するという、必死の試みへと走らせた。フルシチョフは、ケネディの先制攻撃の脅迫は「非常にまずい失敗であり、一ケネディはその代償を支払わねばならないだろう」と警告した⁽⁶⁰⁾。

「マンゲース作戦」

ジョンとロバートのケネディ兄弟は、キューバにたいし執念を燃やしていた。カストロはケネディ兄弟にとって、「手痛い屈辱を思い出させる人物であり、復讐すべき仇」としてつきまとっていたが⁽⁶¹⁾、アメリカの為政者がもっとも憂慮していたのは、アメリカの覇権からラテンアメリカを解放するというカストロの決意だった。キューバをアメリカの帝国支配から脱却させていたカストロと彼の同志たちは、引き続き他のラテンアメリカ諸国も解放しようとしていた。一九六二年二月四日ハバナでの演説で、カストロは「事実上の宣戦布告」をおこなった。後に第二ハバナ宣言として知られるようになったこの演説で、カストロは「ラテンアメリカからアメリカ合衆国へと絶え間なく流れ込んでいる資金は、一分間に約四千ドル、一日に五百万ドル、死体一体あたり千ドルに相当する」と述べてアメリカ帝国主義の被害を糾弾した。そして、「革命を起こすことはすべての革命家の義務である」と宣言した⁽⁶²⁾。二週間後、大統領の要請にしたがいランズデール准将は、キューバ政府を動揺させ打倒するための六段階提案を提出した。

就任前の大統領選挙中、初めてラテンアメリカとの「進歩のための同盟」を提案したとき、ケネディはルーズベルトの善隣政策にならったキャンペーンを構想した。それは、革命的共産主義と権力と富の徹底的再分配によって飢餓とアメリカの支配を克服するというカストロのよびかけにたいし、政治的、経済的、社会的、軍事的対案を示すためのものだった。この「同盟」の計画と宣言はなかなか進まなかった。ビッグズ湾での失敗の後遺症に加えて、信頼性のある提案をつくることそのものの難しさがあった。ソレンセンが説明したように、難題は、「アメリカ人の三分の二の以下の平均寿命、学校、衛生設備、訓練された人員などの不足、一部の地域で起きている天井知らずのインフレ、都市部の深刻なスラム化、不衛生な農村地域、アメリカの投資にたいする

強い警戒心」といったものを解決するための計画をあみだすことだった。一九六一年八月、ウルグアイのプンタ・デル・エステで開かれた米州経済社会評議会の特別会議でようやく提案されたこの計画で、アメリカは、ラテンアメリカの各国政府が「必要な国内措置」をとれば、むこう数十年にわたって二百億ドルの援助をすると約束した⁽⁶³⁾。

ソレンセンが後に認めているように、「現実」は、「リオ・グランデ川をはさんでつくられるこの同盟についてとうとうと述べられた美辞麗句とは、似ても似つかぬものだった」。この計画と西半球での民主的政府にたいするケネディのとりくみは、限られたものだった。それまでの歴代大統領と同様、ケネディと「彼の顧問たちの軍事的な政権奪取にたいする態度には一貫性がなかった」。ソレンセンは、ケネディが多く国において「軍は他の集団より行政に有能で、アメリカにたいしても好意的である場合が多い」と信じていたと書いている。ケネディの矛盾した態度は、ラテンアメリカで知れわたっていた。プンタ・デル・エステの会議で、ある高官はこう言った。「アメリカが止めようとしているのはカストロだ。それ以上ではない。それならできるかもしれない。金と銃があれば、ひとりの人間を止めることはできるから。しかし、カストロ主義を止めることは決してできないだろう」⁽⁶⁴⁾。

ケネディ兄弟は実際、「カストロについてヒステリックになっていた」。彼らはピッグズ湾での失敗が頭から離れず、国防総省とCIAにキューバ指導部を転覆するための新たな計画をつくるよう、絶えずせつついた。彼らは、ラテンアメリカでカストロの影響力が強まっていることに頭を悩ませていた⁽⁶⁵⁾。政権を引き継ぐ際に、アイゼンハワーは次期大統領に、半ば公然の秘密であったグアテマラでのCIAが後押しするキューバ人右翼ゲリラの訓練を含め、カストロ追放のためのさまざまな努力を「最大限」支援するよう励ました⁽⁶⁶⁾。一九六二年の春、ホワイトハウスの命令で、エドワード・ランズデール准将は「マングース作戦」というキューバ侵攻・カストロ転覆計画を考案、実行に着手した。それに先立ち、かつては秘密扱いだった千五百ページの「キューバ挑発、攻撃、崩壊」という文書が証言しているように、ケネディと彼の顧問たちは、カストロの権威を失墜させ追放するために一連の行動を策定した。そのひとつが「不正工作作戦」で、「マーキュリー」宇宙計画が失敗した場合それを隠すための計画だった。宇宙飛行士ジョン・グレンとマーキュリー宇宙カプセルが地球に無事帰還できなかった場合、ケネディ政権はキューバの責任を「証明」する証拠を捏造し利用するつもりだった。「よき時代作戦」は、「豪華な家具が備え付けられ、テーブルには最高のキューバ料理が並べられた部屋でふたりのセクシーな女性といっしょにいる『太ったカストロ』というでっちあげ写真をキューバ国内にばらまく」というものだった。そのビラには「私への配給は別物」というキャプションがつけられることになっていた。さらに、アメリカの侵攻を正当化するために、グアンタナモ海軍基地をやらせ攻撃するという「ビンゴ作戦」もあった⁽⁶⁷⁾。アメリカが自分の政権を孤立化させるだけでなく転覆しようとしていることを自覚していたカストロは、革命政府を強化・防衛するために次第にソ連を頼るようになっていった。このようにして、国務省と国際開発局がラテンアメリカにアメを与えている一方で、国防総省はキューバにムチをくれてやる準備を進めていた。一九六一年の夏から秋のはじめにかけて、統合参謀本部は「スピードと、力と決意でカストロを打倒する」ための封鎖および全面侵略計画の策定を開始した⁽⁶⁸⁾。十一月に入ると、ロバート・ケネディは、この計画立案グループにたいし「上層部では、キューバ問題により高い優先順位を与えたいと考えている」と伝えた。一九六二

年二月、ランズデール准将は「マングース作戦」の計画書を提出した。

翌三月には、アメリカの要員たちが「キューバ入りを開始」することになっていた。四月から七月にかけては、「キューバ国内で革命を起こすための作戦」が開始される予定で、一方ではアメリカから「政治、経済、軍事的な支援」が行なわれるはずだった。八月一日には、計画立案グループに次の作戦への許可が出され、これを受けてただちにキューバ国内でゲリラ攻撃がおこなわれるはずだった。そして、そう登記簿の米軍部隊に支援された反乱蜂起が、二カ月後の十月に開始され、新たな衛星国キューバが誕生することになっていた⁽⁶⁹⁾。

国防総省は、ソ連が「この計画の騒がしい物音を聞きつけてくれれば…それにこしたことはない」と考えていたので、そのやり方は巧妙とはほど遠いものだった。四月にノース・カロライナからカリブ海に四万人の海兵隊と水兵を動員しておこなわれた「マングース作戦」関連の軍事演習は、まったくおおっぴらにおこなわれた。この侵略演習の表向きの目的は架空の独裁者「オルトサック」(Castroの綴りを逆にしたもの)政権の転覆であり、作戦の山場はプエルトリコ領の島ビエケスへの水陸両面からの強襲だった。

マクナマラとバンディは、もし自分たちが「あのときモスクワかハバナにいたら、おそらくアメリカが侵略を準備していると信じただろう」と認めている。しかし彼らは、一九六二年三月にケネディが、計画中のキューバでの反乱に「軍事力で速やかに支援をおこなう」との決定をくだしていたにもかかわらず、マングース作戦の目的は「より強力な行動を起こすのではなく、軍事支援に代わる何かをおこなう」ことだと主張してきた。計画策定グループに近い関係者は、この主張を否定する。たとえば、ケネディの報道官ピエール・サリンジャーは、作戦の目的は「キューバを動揺させ、カストロ政権を一九六二年十月二十日までに打倒することだった」と明言している⁽⁷⁰⁾。

しかし、この作戦にはいくつかの重要な要素が欠けていた。致命的だったのは、ランズデールがキューバに配置した要員たちが、その後アメリカの侵略によって強化されることになっているキューバ国内で起こされる反乱そのものにたいして、一般大衆の支持を得られなかったことである。作戦は取り返しがつかないほど遅れをとってしまった。十月に入った時点でなお、ロバート・ケネディはランズデールやCIA長官マコーンなど上級の計画策定メンバーたちに、「破壊活動はただちに進められなければならない」、「港湾への地雷敷設」計画が考案されなければならないと強く求め、「新しい、よりダイナミックなアプローチ」を考案するよう迫っていた⁽⁷¹⁾。

海外からは、作戦の弱点は、軍事的な動員の規模の陰にかくれてあまり見えなかった。一九六二年春、フルシチョフはブルガリアを訪問したが、そのとき彼には東欧よりもっと気にかかっていることがあった。彼はアメリカが明らかにキューバ侵略の準備を進めていることを深く憂慮し、中国が共産主義運動におけるソ連の主導権に挑んでいることに頭を悩ませていた。彼は後に次のように書いている。「どうしても頭を離れないことがひとつあった。われわれがもしキューバを失ったらどうなるか、ということである。われわれはアメリカのカリブ海介入を阻止する確実に効果的な手段を確立しなければならなかった。論理的な答えは、ミサイルだった」。キューバへのソ連のミサイルと軍事物資の秘密配備の調整役をつとめたアナトリ・I・グリブコフ將軍は、後にこう回顧している。「フルシチョフは戦略兵器の比率——ソ連側が三〇〇基にたいしてアメリカ側は五〇〇〇基——がソ連に極めて不利であることを非常に懸念していたが、彼の主要な目的は、

新生キューバ共和国が勝ち取った自由を守ることを支援し、着々と準備が進んでいるアメリカの侵略を阻止することだった」。予想されるアメリカの侵略へのカストロの恐れは、社会主義の前進に貢献したいという願望によっていっそう強まり、フルシチョフのソ連ミサイルの秘密配備という提案受け入れを決断させた。六月、キューバへのミサイル配備が合意された⁽⁷²⁾。

大衆側から見た歴史

一般大衆のキューバミサイル危機に関する知識は、アメリカではテレビで放映されたケネディの声明や、当時の批判的視点を欠いたマスコミ報道によって形成された。ロバート・ケネディのベストセラー回顧録『十三日間』や、ケネディの信頼の厚かった同僚、特にソレンセンやアーサー・シュレジンジャーらの回顧録、そしてフルシチョフの回顧録などによって、ようやくその事実が完全なものになった。一九九〇年代半ば以降、ホワイトハウスで秘密に録音されたケネディの音声を起こした原稿の発表、公式文書の機密解除、当時の意思決定者が参加する会議などにより、アメリカ、ソ連およびキューバの指導者たちの判断や破滅的ともいうべき誤算が、あらためて明らかになった。

ロバート・ケネディが述べているように、「どちらの側も、キューバをめぐる戦争は望んでいなかった。しかしいずれの側も、相手側に「安全保障」、「プライド」、「メンツ」といった理由から対応を迫る行動を起こす可能性があったし、もしかするとそれが武力紛争へと拡大したかもしれない⁽⁷³⁾。学者のリチャード・E・ノイスタットとグラハム・T・アリソンは、ケネディの著書のあとがきで、当時の通説を描写し補強している。「ロバート・ケネディはマクナマラ同様、核破滅が現実になるかもしれないという考えにとりつかれていた。フルシチョフは、大統領を**狂気の行動へと駆り立てよう**としていたのだろうか。」一般の人々は、アメリカの指導者は良いことをするものだと思っていた。アメリカが核戦争を引き起こしたとしても、それはあくまでソ連政府のせいだった。ピューリッツァー賞を受賞したジャーナリスト、マックス・フランケルが書いているように、「一九六二年の夏、すべてはトロイの木馬のロシア版ともいうべき策略で始まった」⁽⁷⁴⁾。

フルシチョフの回顧録を除けば、通俗的な歴史には、破壊的な核兵器をもつ二つの大国の対立の構図が描かれている。そのほとんどが、ロシア側は危険なほど向こう見ずで、アメリカ大統領に「狂気の」行動を「とらせ」ようとしているように描いている。一方ケネディ政権と顧問たちは、注意深く、慎重で、しかも勇気があるように描かれている。ソ連は、無法なミサイル配備によってわずかな核の劣勢の挽回をめざし、あるいはおそらく優位にたつことをねらっているように描かれている。このような史実の解釈は、アメリカの圧倒的な核の優位を無視するものである。「マングース作戦」とそれがキューバとモスクワに引き起こした恐怖も、見過ごされている。カストロは、彼の国際共産主義への献身ゆえにソ連のミサイルを受け入れたように描かれている。

ミサイル危機の一般的な理解について、ノイスタットとアリソンは次のように簡潔に整理している。

- 一九六二年九月六日、フルシチョフ決定の四カ月後、ソ連がキューバに核弾頭搭載可能ミサイルを陸揚げする。
- 十月十四日、U2偵察機が、キューバ上空からミサイルを撮影。アメリカの政策立案者らがいっ、いわゆる十三日間危機が始まる。
- 十月二十二日、ケネディ大統領がテレビ演説で公式に対決姿勢を表明し、さらにソ連のミサイル配備を公表して、その撤去をもとめ、キューバにたいする軍事「封鎖」を宣言し、米軍に警戒態勢をとらせた。これにたいし、フルシチョフはソ連軍に警戒態勢を敷き、「キューバへ向かうソ連の艦船を妨害する米艦船は撃沈する」と威嚇した。
- 十月二十四日、対立がもっとも緊迫した二つの時期のひとつとなったこの日。キューバに向かったソ連船が封鎖船の手前で停泊し、何隻かはソ連に引き返した。
- 十月二十六日、ニキータ・フルシチョフはケネディ大統領に、まとまりがないが実質的には脅迫の内容の手紙を送り、キューバを侵略しないというアメリカの誓約と引き換えに、ソ連はキューバからミサイルを撤去すると提案した。
- 十月二十七日、フルシチョフは十月二十六日付の手紙に続き、トルコにあるアメリカのミサイル撤去を要求する、より強硬な手紙を送った。ケネディ大統領は、キューバのミサイル撤去の代償としてアメリカがキューバ不侵略の誓約をするという、フルシチョフの最初の提案を受け入れる意思を示した。さらにソ連のミサイルの撤去が翌日に開始されなければ、アメリカは空爆または侵攻を月曜か火曜、つまり二十九日か三十日に開始すると警告した。
- 十月二十八日、クレムリンによるキューバからのミサイル撤去の発表で、対決は頂点に達した⁽⁷⁵⁾。

限界はあるにせよ、公式な歴史には、ほとんど注目されないが意味深く恐ろしい事実が多く含まれている。まず、エクスクム（国家安全保障会議執行委員会）内でおこなわれた自由な議論は、危機の進行中に複数の柔軟性をもった選択肢の提案を可能にしたことで高く評価されている⁽⁷⁶⁾。事実、マクナマラなど上層部の何人かは、一方の極論から正反対の極論へと激しく揺れた。対決の間中、エクスクムは常に二つの陣営に分かれていた。ひとつは元駐ソ連大使のチップ・ポーレンとルエリン・トンプソンのふたりとロバート・ケネディが率いる陣営で、ソ連の指導者たちは理性的であり、拡大過程の各段階で彼らを圧倒するという意思と理論上の実行能力がアメリカにあるとわかれば、相手は引き下がるだろうと考えていた。しかし、彼らは同時に、「威信と権力」の論理がはたらけば、「どちらの側も核兵器の使用に訴えることなしには引き下がらない」状況が生まれるかもしれないということも、理解していた⁽⁷⁷⁾。

ロバート・ケネディがもっとも恐れていた、より可能性が高い段階的拡大のシナリオのひとつは、「われわれがキューバを空爆し、ソ連がその報復としてトルコを攻撃すれば、すべてのNATO諸国が巻き込まれることになる。そうなれば、大統領はソ連にたいして核兵器を使用するかどうかの選択を迫られ、全人類を危険にさらすことになる」⁽⁷⁸⁾。アメリカの封鎖線を破ろうとするソ連の貨物船または軍艦の撃沈によって海上での交戦が起こった場合にも、同様の筋書きが成り立つ。

ケネディが恐れたシナリオは、フルシチョフが大統領の十月二十七日の警告を受けて、キューバからミサイルを撤去する気がなくなってしまうか、またはできなくなってしまうことを想定していた。そうなれば、ケネディには政治的工作の余地がほとんどなくなり、キューバにあるソ連のミサイル、核兵器貯蔵壕、イリュージン爆撃機への空爆を許可することになっていた。キューバのソ連軍にたいするアメリカの破壊的な空爆で公然と面目をつぶされたフルシチョフは、トルコの米ミサイル基地破壊命令を出す。拡大は次の段階に進み、最低でも、アメリカをはじめとするNATO諸国はソ連のミサイル基地を攻撃する。最後に、ソ連の指導者たちはアメリカによるさらなる攻撃を恐れ、「(核兵器は)使わなければ無駄になる」の論理に従って、アメリカやヨーロッパ諸国にたいし残っている核兵器を使い、アメリカはこれに大陸間および潜水艦発射弾道ミサイルで報復するだろう⁽⁷⁹⁾。

エクソコム内のもうひとつの陣営は、強力だが影響力はより小さく、考え方も教条主義的だった。彼らは、ソ連は決定的な力の不均衡にたいし「理性的に」対応しアメリカの要求に応じるだろうと考えていた。ディーン・アチソン、ディロン財務長官、ポール・ニツツェ国防次官に率いられたこのグループは、アメリカは戦略的、戦術的軍事力で圧倒的に優勢であり、たとえ危険が生じて、その危険は「われわれは駆逐艦や部隊、航空機が大西洋とフロリダ湾に展開するまでしか続かない」と確信していた。「われわれはフルシチョフの指を親指締め器にのせていたのだから、そのねじを毎日ひとひねりずつ締め上げるべきだったのだ」とアチソンが表現したように。このグループの価値感や信条は、統合参謀本部のそれと似ていた。事実その一員のカーティス・ルメイ将軍は、大統領に「アメリカによる侵攻にモスクワは何も反応しないだろう」⁽⁸⁰⁾と述べている。危機が続いている間、キューバにどれくらいの数のソ連軍が駐留しているのかも、モスクワから派遣されている司令官が配備されているミサイルを守るために戦術核兵器を使用する権限を与えられていることも知らないまま、統合参謀本部は大統領に、キューバのソ連軍とキューバ軍への軍事攻撃を許可するよう一貫して強く求めていた⁽⁸¹⁾。

ケネディ政権の対応は、アメリカの核の優位性を維持するという決意を反映していた。危機が続いている間、ホワイトハウスは「柔軟的対応」と「エスカレーション支配」ドクトリンに依存し、破滅的な核戦争の危険を冒すことをためらわないという意思を繰り返し示した。危機が頂点に達したとき、ケネディはアドレイ・ステイブソン国連大使に、「キューバからミサイルを撤去させるというアメリカの決意は揺るがない。この点ではいかなるためらいもあってはならない。今こそ強気に出るときだ」と指示した⁽⁸²⁾。数日後、大統領が十月二十七日にフルシチョフに送った手紙は、もはや撤回が不可能な最後通牒で結ばれていた。

なぜ、フルシチョフは、核対決の危険を冒すにいたったのだろうか？ 彼の回想録は、アメリカが、ケネディが先制攻撃を命令するかもしれない可能性を含め、ソ連の核抑止力の不在をさらに利用するのではないかという恐れが主たる動機だったということを確認している⁽⁸³⁾。キューバへの核兵器配備によって、フルシチョフは恐怖の不均衡をただし、相互確証破壊(MAD)を達成しようとした。実際にそれができたのは、十年後のことだったが。フルシチョフの見解は、「アメリカは、われわれが(キューバに)設置した施設を軍事的手段によって破壊する前に、よくよく考えるだろう。たとえ四分の一、あるいは十分の一のミサイルしか残らなくても——大型のが一発か二発だけとしても——われわれはなおニューヨークを攻撃し、膨大な数の人間を消し去るこ

とができるのだ」。フルシチョフはアメリカに「アメリカが使っている薬を少しだけ使った」のである。このことが、顧問の全員が必ずしもそうではなかったとしても、ケネディを冷静にさせたのである⁽⁸⁴⁾。

策略、認識、段階的戦争拡大による支配

一九六二年の夏の間ずっと、認知的不協和によって身動きできなくなったケネディと高官たちは、情報報告とキューバの移民社会の間に広まっていた、キューバにソ連の軍隊とミサイルが到着したというわさを軽視していた。ソ連は常に西半球におけるアメリカの覇権を尊重してきたし、それに対抗することの危険を理解していた。大統領は、こうした主張は誇張されたもので、アメリカにかつての植民地の再征服をそそのかすものだと結論づけた。

八月から九月の終わりまで、ケネディはジョン・マコーンCIA長官とレイ・クライン副長官が発した警告を深刻に受け取ろうとしなかった。九月十五日に最初のミサイルがマリエル港に到着するほぼ一か月前、マコーンはケネディに、七月と八月に「四、五千人のソ連圏技術者とおそらくは軍人が到着」し、「装備や物資を積んだ多くの船荷が到着」したということは「クレムリンがキューバを中距離弾道ミサイルの基地にしようとしている」ことを意味するとの覚書を送った。

マコーンは三つの行動方針を提案した。すなわち、一)「ラテンアメリカ全土およびすべての自由世界に、現在のキューバの状況に内在する危険」を自覚させる、二)「十分な武力を即時派遣してキューバを占領し、政権を打倒し、国民を解放する」というものであった。三つめの提案は現在も機密扱いである⁽⁸⁵⁾。二日後マコーンは、「もしキューバが成功すれば、ラテンアメリカの大部分が崩壊することを覚悟しなければならない」と警告した。九月はじめ、クラインは「U2偵察機の写真によって、この数週間に大規模なソ連の兵器搬送がおこなわれていることを確認」と報告した⁽⁸⁶⁾。ソ連のミサイルが到着する五日前の九月十日、マコーンは新婚旅行先から必死の電報を打った。

現在とられている措置の目的は、現在の段階が完了し領空侵犯される恐れなしと確認後、ソ連が準中距離弾道弾などの一定の攻撃能力を秘密裏に確保することなり⁽⁸⁷⁾。

選挙の年にあたり、ケネディ政権はキューバへのソ連のミサイル配備を見て見ぬふりをしているというケス・キーティング上院議員からの圧力が強まるも、またマコーンの力説を受けて、政府は九月四日を政治危機の高まりを抑えることにあてた。その日は、閣僚による予行演習的な議論で始まったが、六週間後それが現実のものになる。マクナマラは、モスクワがキューバに送っている時代遅れのミグ戦闘機でさえ、ラテンアメリカ諸国のアメリカにたいする信頼を損なうものだと訴えた。バンディは、もしソ連がキューバに核武装したミサイルを配備すれば、キューバにおけるソ連のプレゼンスを守勢から攻勢へとかえる「転機」になると主張した。しかし彼は、これによってもアメリカは十五対一という核の優位を保つだろうと忠告した。ラスクは、ミサイル配備は認められないものであり、「キューバを弱体化させるために組織的な封鎖」が必要であり、

それによって「大量の死者」を出すことになる侵攻を避けることもできるだろうと主張した⁽⁸⁸⁾。

その日遅く、議会の指導者たちとの会合でケネディは、キューバの状況は監視していると請合い、もし最終的に自分が封鎖の宣言が必要だと判断すれば、西ベルリンへのソ連の圧力が再び強まることを覚悟しなければならなくなるとの懸念を述べた。共和党はもちろん民主党指導部からも圧力がかかり、ケネディは、もしソ連がキューバに地対地ミサイルを配備すれば、「状況は大きく変わり、われわれは行動しなければならないだろう」と約束した。最後に、キーティング上院議員の非難がもたらした国民の不安を解消するために、サリンジャー報道官は、キューバにソ連圏の戦闘部隊がいるとの証拠も、ソ連が軍事基地あるいは「攻撃用地対地ミサイル」をつくっているという兆候もまったくないとの声明を発表した。彼は「もしそうだとしたら」、「もっとも重大な問題が生じるはずである」と保証した。

サリンジャーの声明発表を知ったフルシチョフは、自分の核計略が見抜かれたのではないかと不安になった。そして、「侵攻への抵抗または抑止ができるように」核武装した大砲の砲弾を含め、すでにキューバに向かっていたソ連軍の強化を命じた⁽⁸⁹⁾。

フルシチョフの恐れは、早計だった。U2偵察機がシベリア東部のサハリン島上空に無許可で侵入したため、ケネディ大統領は作戦手続きの再検討が終わるまですべてのU2偵察機の飛行を中止せざるを得なかった。したがってキューバ上空でのスパイ飛行は一カ月以上中止され、再開されたのは十月十四日のことだった。その翌日、U2偵察機の撮影フィルムで、ソ連が実際にキューバに中距離ミサイルを配備していることを裏付けられたとの報告が、衝撃をもたらした。2箇所、ことによると3箇所でミサイル配備地の建設が始まっていた。衝撃の要素を取り戻すために、ケネディはこの報告および後にエクスコムと呼ばれるようになる会議の議論は、完全に秘密にしておくべきだと主張した。

ケネディ政権は、目を見張るほど機敏に、反射的に対応した。あえて反対の立場を装ったのかもしれないが、ケネディはミサイル配備がとりたてて問題になるのだろうかとの疑問を口にした。彼は、「いずれにしても、彼らはわれわれを吹き飛ばすのに十分なものを持っている」と誤った発言をしつつ、「われわれと同等であるかのように見せている」と不満を述べた⁽⁹⁰⁾。マクナマラは、国防総省はソ連政府とのいかなる交渉にも反対だと報告した。統合参謀本部は、外交ではアメリカの勝利を遅らせるか、もしかすると妨げることになると確信していた。彼らは「すべてのソ連およびキューバの戦闘機、飛行場、銃器と核兵器の貯蔵場所を攻撃し、海上封鎖をおこなって新たな武器輸送を防止し、全面侵攻でかたをつけたい」と考えていた⁽⁹¹⁾。ラスクもほぼ同様に交戦を主張し、アメリカは一九五六年のハンガリー蜂起のときに介入しなかったのはブタペストがソ連の勢力圏内にあったためであり、「この半球においての今回の行動は、西半球でのアメリカの、歴史的に周知の外交政策を侵害するものである」と述べた⁽⁹²⁾。

ラテンアメリカ担当国務次官補エドウィン・マーティンは、「われわれが何もせず彼らの好きにさせているのは、心理的要因だ。それは直接の脅迫より重要である」と述べて、危機にたいする政府のとらえ方を明確にした⁽⁹³⁾。この立場は、改定版国家情報評価の以下のような警告によって、強化された。

ソ連のキューバにおける軍事増強の主たる目的は、世界の戦力の均衡がソ連有利へと変わり、

アメリカがもはや自国のある半球においてさえ、ソ連の攻撃力の前進を阻むことはできないことを示すことである。同時に、ソ連はキューバにある自分たちのミサイル兵器が、アメリカに対抗する全戦略能力への重要な貢献になることを期待しているのである⁽⁹⁴⁾。

アメリカの、南北アメリカとそれを越えた帝国主義支配を心理的に支えていた基盤がいまや、危うくなっていた。キューバを「西半球に突きつけられたピストル」ととらえたエクスコムは、当初、「ミサイル基地への空爆が唯一の道」との合意に達した。危機の二日目、ロバート・ケネディは、「もう一度メイン号を沈めるか、あるいはなにか」を**開戦の理由**にできるだろうと提案した。「なにか」には、「グアンタナモ基地への偽装攻撃」も含まれ得るとしていた⁽⁹⁵⁾。

危機の三日目、ソレンセンはエクスコムの考え方を整理した。

全体として、これらのミサイルが、完全に実戦での使用可能だとしても、力の均衡を大きく変えるものではないと意見が一致した。

それでもなお、われわれの勇気と決意を同盟国や敵国に信用させるためには、アメリカはその沿岸から九十マイルにある国に攻撃核兵器の存在が確認されているのを容認することはできないということが、全体として合意され、以下の方針または一連の措置が検討されている。

方針A—政治的行動、圧力と警告をおこない、満足の行く結果が得られなければ軍事攻撃。

方針B—限定的性格のものであることを明確にするメッセージを発しながらの、事前警告なしの軍事攻撃。

方針C—政治的行動と警告に続く全面的海上封鎖。

方針D—「キューバをカストロから奪還するための」全面侵攻。

言うまでもなく、これらのいずれも、他の方針へとつながる可能性がある⁽⁹⁶⁾。

マクナマラ国防長官は、キューバへ送られる軍事物質の海上「交通遮断」を強く主張する前に、キューバにあるソ連のミサイルは、世界の力の不均衡に重大な変更をおよぼさないというエクスコム「全体の合意」をつくりあげていた。ミサイル配備によって、ソ連による攻撃の警告時間は縮まったが、それだけでアメリカの国民皆殺し核攻撃による報復能力が大幅に制限されるとは考えられなかった。マクナマラの見方では、「このミサイル配備が意味していたのは…米ソ間のミサイルギャップが狭まったということで、それはもともと避けられないことだった。それが思っていたより早く起こっただけのことだ」。マクナマラは当初、アメリカの核兵器がソ連の十七倍なのか、それよりやや少ないのかということは、大した問題ではないと考えた。いずれにしても、容認できないほど膨大な数の「アメリカ人の死傷者」をだすことには変わりはないからである⁽⁹⁷⁾。

マクナマラの当初の合理主義は、ソ連のミサイル配備はアメリカの信頼と決意を損なうものであるとの議論におされてしぼんでいった。そして彼は、「ラテンアメリカやその他の地域にたいする政治的影響が大きい」ことを認めた。大統領もこれに同意し、次のように述べた。「ミサイルの軍事的影響より、世界の力のバランスに及ぼす影響を懸念している。それは…現状を変えようとする挑発行為だった。ソ連が西半球にミサイルを配備することは、特にラテンアメリカに与える

政治的、心理的効果という点で、ソ連の領土内や潜水艦に配備されたミサイルとは大きく異なっていた」⁽⁹⁸⁾。

大統領はまた危機の間、国内政治への配慮で頭がいっぱいだった。皮肉なことに、アドレイ・スティーブソンが主張したように、ミサイル配備の軍事的あるいは実際的な影響より、その潜在的な「政治的」影響が決定的要因だった。彼は、「どんな政治家でも、キューバのソ連ミサイルが何を目的としているかわからないわけではない。われわれとしては、とにかくミサイルをあそこからなくさなければならない。ラテンアメリカが直接巻き込まれたり、威嚇を受けたのは、これが初めてなのだ」と論じた⁽⁹⁹⁾。

この危機を大統領職を脅かすものと理解していたケネディにとって、これは新しい主張ではなかった。ミサイル配備の報告を最初に受けたとき、ジョン・ケネディの反応は「まさかやつが、そんなことを」だった。ニューヨーク・タイムズ紙のマックス・フランケル記者は後に、ミサイル配備は「ケネディをたんに弱いだけでなく、危険なほどだまされやすい人間に見せた」と書いた。フルシチョフ同様、国内の政治的・帝國的必要に迫られ、ケネディは、自分と米国民は弱くはないことを証明しなければならなかった⁽¹⁰⁰⁾。

ケネディ兄弟はこうして、フルシチョフに公然とだまされるという不面目を受けたこと、そしてもし彼が優勢に立つようなことになれば、アメリカの「ホームグラウンド」である西半球でアメリカに対抗できる力があることに、世界の大半がソ連に対して畏敬の念をもつであろう可能性がおよぼす心理的・政治的ダメージを抑えようと必死だった。ケネディは、米海軍が「遮断」地帯に近づくソ連船に立ち向かう準備をしていた十月二十四日、弟のロバートに選択肢はないと打ち明けたとき、自分の計算と核脅迫のなかで国内政治が果たしている役割を強調した。彼は核対決のエスカレーションに代わる選択肢は、弾劾だと考えていた。「それが私の考えだ」と大統領は言った。「私は弾劾されていたかもしれない」⁽¹⁰¹⁾。

数日のうちに、エクスコムは選択肢を二つに絞った。キューバへの封鎖をおこなうか、あるいはミサイル基地を建設が終わる前に爆撃するか（その後侵攻してカストロを倒す可能性も伴う）であった。マクナマラはロバート・ケネディとジョージ・ボールとともに、封鎖は「状況が許せば拡大可能な限定的圧力」のひとつの形式であると主張した。つまり、ケネディは、空爆から侵攻、そして最悪のシナリオであるソ連との交戦へと戦争を段階的に拡大していくこともあり得ると言ったのである⁽¹⁰²⁾。

トンプソン前駐ソ連大使は、ソ連が軍事行動で「封鎖に抵抗することはきわめて疑わしい」と主張し、封鎖へと局面を変えていくうえで重要な役割を果たした。ベルリンをめぐる危機で、ソ連は軍事脅迫を取り下げていた。五千マイル離れたキューバでは、モスクワはさらに大きな軍事上不利な条件に置かれていると、トンプソンは説明した。直ちに軍事攻撃に進むのではなく封鎖によって自制を示すことで、ケネディは、この十年間の大半をソ連の核兵器の射程内で生活してきた西欧諸国の政府や国民の支持も得られるだろうというのであった。もっとも重要なことは、フルシチョフにとって交通遮断は最小限の屈辱にとどまり、退却とミサイル撤去を迫る政治的威嚇になるのであった⁽¹⁰³⁾。

危機全般を通じて、統合参謀本部とその同盟者であるエクスコムは攻撃的な軍事行動を強くもとめた。当初から、アチソン、テイラー、ニッツェらは空爆を主張した。彼らは、封鎖でミサイ

ルを確実に撤去できるとは思わなかった。空爆であれば対決の焦点をカストロとキューバに絞ることができるのにたいし、封鎖はソ連の西ベルリン封鎖による水平的拡散を引き起こしかねないと主張した⁽¹⁰⁴⁾。ロバート・ケネディは、空爆が完全に成功するかを疑問視し、東条によるパール・ハーバーの奇襲攻撃にも匹敵するような行動には躊躇していたが、アチソンはこれに異論を唱え、「アメリカがヨーロッパのいかなる国のアメリカ大陸への侵入も認めないことを世界に宣言した」モンロー主義をくり返し主張した。大統領は、ソ連がキューバに攻撃用兵器を移設すれば、アメリカは行動に出ざるを得なくなるとすでにモスクワに警告しているし、議会もこの配備を阻止するために「武器の使用を含むあらゆる必要な手段を行使する」権限をすでに大統領に与えると公表しているのではないかと、アチソンは主張した⁽¹⁰⁵⁾。

ケネディは、より攻撃的なアプローチを支持したアイゼンハワー前大統領に相談した。アイゼンハワーは封鎖は決定的ではないことを恐れ、それを実行することの困難さを指摘した。アイゼンハワーは、「ハバナを切り離すことによって政府の中心を握る」ことができる軍事行動の方を支持した。彼は、その行動は、従来のもたもたとした侵攻で海岸の上陸地点を強襲するより、「空挺師団によってなされるべき」だと提案した⁽¹⁰⁶⁾。

軍事行動または侵攻を主張する人々は、アメリカが軍事的に圧倒的に有利であると信じていた。危機が頂点に近づいた十月二十六日にマックスウェル・テイラーが助言したように、「われわれは戦略的優勢を保っている・・・失敗を恐れているときではない」と考えていたのだ⁽¹⁰⁷⁾。

当初、正式な戦争行為と受け取られるのを避けるため後に「交通遮断」と呼び名を変えた封鎖を支持する者が圧倒的であった。それは単に、封鎖が戦争の段階的拡大の可能性を排除しないという理由からであった。数日のうちに、アメリカの各部隊は警戒態勢に入った。キューバへの二〇〇〇回の空爆出撃準備が完了し、二五万人の兵士がキューバ侵攻のために動員され、「マンガース作戦」の指揮官らは、「カストロ後のキューバ政府の計画を進める政治局の設置」を命じられた。ロバート・ケネディは、危機が頂点に達した十月二十七日の夜、ドブルイニン大使と会談し、「われわれは明日までに、基地を撤去するという約束を取り付けなければならない。彼らが撤去しないなら、われわれが撤去させるしかない」と警告した⁽¹⁰⁸⁾。

核の不平等の差別的原則

アメリカの核の優位がどれほど大きいものか、あるいは国防総省が第一撃による死者数をどれぐらいと見ているかについて、アメリカ国内で知っているものはほとんどいなかった。ケネディは、ソ連と中国の基地や都市にたいして二八四基のICBMの発射命令を出すことができたが、フルシチョフがもっていた理論上使用可能なものは四基だった⁽¹⁰⁹⁾。核戦争は起こるだろう——それが正しいことばだとするなら——主として水爆によって。全面的核戦争になれば、アメリカの核攻撃から最初の六か月で二億七五〇万から三億二五〇万人が死ぬだろう。時とともに、東欧ではさらに一億人が死ぬだろう。時期と風向きによっては、西欧でもさらに一億人が死ぬだろう。放射性降下物の進路に当たるアフガニスタンと日本は、「壊滅」するだろう⁽¹¹⁰⁾。

政治的情勢もあった。フルシチョフは、「アメリカは爆撃基地とミサイルですでにソ連を包囲し

ている。アメリカのミサイルは、西ドイツはいうまでもなく、トルコでも、イタリアでも、われわれに照準を当てている」という侮辱で頭がいっぱいだった⁽¹¹¹⁾。

一般のアメリカ国民は知らなかったが、エクスコム内では、これらの時代遅れのミサイルに関して、そしてアメリカはソ連国境にミサイルを配備できるが、ソ連はアメリカにたいして同じことをしてはならないという差別的原則の維持をめぐる、相当な議論がたたかわされていた。対決が頂点に達したとき、エクスコムのほとんどのメンバーはこの原則を曲げて譲歩するより、破滅的な核戦争の危険を冒すほうを選んだ⁽¹¹²⁾。

キューバからのミサイル撤去と引き換えにトルコのミサイルを撤去する可能性が初めて提起されたのは、危機三日目、ジョージ・ボールによってであった。彼は、「トルコの基地との取引」を提案し、「今あるミサイルをポラリスミサイルと取り代える。全面戦争をする必要はないのだ」⁽¹¹³⁾。二日後、アドレイ・スティーブソンがボールを支持し、アメリカの核の優位性をまったく損わないこの戦略的妥協をともに主張した。

エクスコムのメンバーはほとんど知らなかったが、ケネディは危機が発生する前に二度、トルコのジュピターミサイル十五基を撤去するよう指示を出していた。マクナマラ国防長官が以前、ジュピターを「がらくたの山」⁽¹¹⁴⁾と評していたのだ。「不確実、不正確で、時代遅れで、破壊活動にたいして脆弱すぎた」からである。トルコ政府は撤去に反対し、ケネディの指示は結局、外交の泥沼にはまってしまった。ミサイル危機の直前に、アメリカ議会の両院合同原子力委員会が、トルコとイタリアにあるジュピターとソアーミサイルの撤去を勧告し、この問題が再び浮上した⁽¹¹⁵⁾。

こうしたいきさつにもかかわらず、ケネディはボールとスティーブソンの提案をきっぱりと拒絶した。ソ連の脅迫を受けてミサイルを撤去すれば、「われわれはパニック状態にある」と伝えることになり⁽¹¹⁶⁾、アメリカの同盟と信用を損なうと考えた。ケネディがボール＝スティーブソン提案を最初に拒否したとき、彼を支持したのは、イスタンブールにいたヘアー駐トルコ大使だった。大使は「キューバ情勢とのからみでジュピターをトルコから撤去すれば、トルコとアメリカの二国間関係だけでなく、NATOの連合においても大きな問題になるだろう。トルコの状況はまったく異なるとして、いかなる形であれトルコとキューバを組み合わせることには、激しく憤慨するだろう」と述べた⁽¹¹⁷⁾。

十月二十五日、危機十日目、アメリカとソ連が核戦争の瀬戸際に近づいていたとき、ジュピターミサイルをめぐる議論が、突然公の場に踊り出た。リベラル派ジャーナリストの長老、ウォルター・リップマンが、ケネディ大統領、ドブレニン駐米ソ連大使はじめ多くの人々が読んでいたワシントン・ポスト紙で、政治的爆弾提案をおこなったからである⁽¹¹⁸⁾。リップマンは、大統領は「体面を保つような合意」をすべきだと提案した。彼は「『キューバとベルリン』の政治取引」を主張しているのではないと明言した。両者が等価ではないからであった。「キューバと真に比較できる唯一の場所はトルコである。ソ連との国境線の真上に戦略核兵器が置かれているのは、そこしかない」と彼は書いた。リップマンはさらに、キューバの軍事基地とトルコの軍事基地のもうひとつの共通点を説明した。両者とも、「軍事的価値が小さい」ということだ。

リップマンの提案は、それが掲載された当日は、エクスコムもマスコミも、ほとんど取り上げなかった。彼らの注意は、交通遮断域内で初めてソ連船が捕獲されたという地味な事件に向けら

れていた⁽¹¹⁹⁾。

二日後、ソ連のキューバミサイル基地は完成間近となり、ホワイトハウスと議会ではキューバへの即時侵攻をもとめる圧力が高まるとともに、トルコのミサイルの運命が焦点に浮上した。国際的に報道されたソ連政府からケネディ大統領宛ての十月二十七日付の強硬な公式書簡は、危機を平和的に解決するつもりなら、ジュピターミサイルと撤去すべきであると述べていた。ソ連指導部はこう書いている。

あなたはキューバのことを心配しておられる。キューバは米国の海岸から海を隔ててわずか九十マイルの距離にあるから心配なのだといわれる。しかしながら、トルコはわが国とは陸続きです。われわれの歩哨は、行きつ戻りつしながら両国を監視しています。こちらに自国の安全と、あなたが攻撃用といわれる兵器の撤去を求めながら、同じことをこちらがもとめることは認めない、そんな権利がはたしてあなたにあると思いますか⁽¹²⁰⁾。

ロバート・ケネディは後に、「ロシアのおこなった提案は法外なものではなかったし、アメリカやNATO同盟国に損失となるものでもなかった」と回想している。単に受け入れることができないだけだった。提案は大統領に「自信を失わせ」、困惑させ、憤慨させた。十月二十八日、密かにフルシチョフとともに瞬きして目線をそらすまで、ケネディはソ連の脅迫に屈してトルコからミサイルを撤去することに抵抗し続けたが、同時に「時代遅れとなったトルコのミサイル基地のために、アメリカと人類を破滅的な戦争に巻き込みたくもなかった」。

エクスコム内では、トンプソン前駐ソ大使が、ソ連の提案は「いかにも双方に平等のように見える」が、これを受け入れることはワシントンの弱さの証明ととられかねないと警告した。ラスクとバンディも、「もしわれわれがトルコの防衛とキューバへの脅迫を取引しているように見られれば」、NATO同盟ばかりか、アメリカの世界的支配まで深刻な打撃を受けるとして、トンプソンに同調した。マクナマラとディロンも、事態打開のための撤去はすべきでないという意見だった⁽¹²¹⁾。

大統領と、メンバーの大半がキューバ侵攻を主張しているエクスコムは、戦争回避の最後の努力として、ソ連指導部が正式に申し入れたことのない解決方式を承認することで合意した。フルシチョフに宛てた手紙で、ケネディは、ソ連が国連の監視のもとでミサイルを撤去し、キューバへ再びミサイルを配備しないと誓約するのなら、アメリカは「キューバへ侵攻しないことを保証」することを伝えた。ケネディの秘密の提案は、ジュピターミサイルについても遠まわしに言及していた。キューバからのソ連ミサイルの撤去によって、「われわれはあなたが二通目の手紙のなかで提案し、公表した『その他の軍備』にたいして、より総合的な措置をとる方向で努力できるようになるでしょう」と書いている。ケネディはさらに、ソ連がこの提案を受け入れなければ、「キューバ危機の激化と世界平和にとっての、重大な危険を招くことになるでしょう」と言い添えた⁽¹²²⁾。

十月二十七日、エクスコムの会議が終了したとき、誰もが、大統領は明日にも空爆とキューバ侵攻を十月二十九日ないし三十日に開始するとの命令を出すだろうと信じていた⁽¹²³⁾。マクナマラ国防長官は次の土曜日には生きていないかもしれないと思いながら、ロバート・ケネディにキュー

バの新政府を組織する必要があると念を押すのを忘れなかった。ロバート・ケネディをハバナの市長に任命しようと、冗談をいう者さえいた⁽¹²⁴⁾。

その晩、ソ連側がこの提案の内容と、もう時間がないということを十分理解したか確認するため、ロバート・ケネディがドブレイン大使と会談した。大統領以外には知らされなかったが、その会談でロバート・ケネディは、大統領がソ連のミサイルの撤去を確実にするため、さらなる譲歩をする用意があると述べている。「その他の軍備」とは、トルコのジュピターミサイルのことであると、彼は強調した。フルシチョフが秘密を守るなら、ジュピターは三か月以内に撤去されるだろう。モスクワが好ましい対応をするのか確証は何もないままロバート・ケネディがホワイトハウスに戻ったとき、大統領は空軍の兵員輸送予備機二十四機を現役配備する命令を下していた。侵攻に必要なかもしれないからである。

フルシチョフは、何億人もの人命を危険にさらす賭けには、ケネディや顧問たち以上に乗り気でなかった。翌朝、フルシチョフとクレムリンは二度目の合図を送った。彼らはキューバを攻撃しないこと、極秘の期待される「思慮ある国際情勢の評価」と引き換えに、キューバからミサイルを公然と撤去するという屈辱を「理性的に」受け入れたのだった⁽¹²⁵⁾。

その他の真実

冷戦の終結で、米ソの公文書保管所は秘密文書の開示を始めた。一九九〇年代、長い間秘密扱いだった文書がようやく公表され、生存するミサイル危機の関係者が会議などに参加してそれぞれの記憶を共有し、双方の予測や誤算について検討する機会を得た。

公式の歴史の大部分を詳細に確認する一方、秘密の覚書や会合が、対立が核戦争へと拡大する危険性は、大多数の人々が——多くの政策立案者を含めて——当時理解していたよりもはるかに大きかったことを明らかにした。あの対立は事実、人類史上もっとも危険な危機だった。一度ならず、個人の、あるいは集団の行動が、世界を核による破滅の瀬戸際まで追い込んだ。同様に、ほとんど知られていないが、危機をまねいた人々やソ連の潜水艦司令官の決定が、数億人の命を救ったのである。

アメリカの憲法が定めているように、大統領は米軍の最高司令官であり、米軍は完全にその指揮下にあると、広く考えられている。実際に、広島と長崎への原爆投下や、二〇〇三年のイラク侵攻での見識や戦略に関する文民および制服組の軍指導者の決定が示すように、ホワイトハウスと国防総省の基本方針は必ずしも一致しない。さらに悪いことには、キューバ危機での上級将校の無許可の行動が、軍は人間社会であり、その構成員は大統領やほとんどの上級顧問とは無関係に行動できるし、実際に行動してきたことを、容赦なく想起させた。

存命中のアメリカ、ソ連、キューバのミサイル危機に関する意思決定者たちが集った一九九二年のハバナ会議で、ウィリアム・スミス将軍が語ったように、統合参謀本部とホワイトハウスは危機の最中、それぞれ類似している目的と同時に異なる目的をも追求していた。ケネディ大統領の目的はただひとつ、ソ連のミサイルをキューバから撤去させるということだった。これは統合参謀本部議長らも同じだったが、同時にケネディはこの危機を利用してカストロを追放し、ホワイ

トハウスの尊敬を回復し、各軍のそれぞれ個別の要求を満たすことをねらっていた⁽¹²⁶⁾。

キューバを侵攻すべきかどうかをめぐるケネディと将軍たちとの間の緊張の激しさは、ルメイ将軍は、「ほとんどの者が大統領に面と向かって腰抜けと呼んだ」と述べたほどであった。大統領の極秘録音テープでも、ケネディが統合参謀長らの侵攻提案を保留にしたとき、デイビッド・シャウプ海兵隊司令官は大統領に悪態をつき、ウィーラー将軍はケネディが侵攻への許可を拒否したことに激怒し、マックス・テイラーに「自分が生きているあいだに戦争を始めたいと思う日が来るとは、夢にも思わなかった」とまで言ったことが明らかになっている⁽¹²⁷⁾。

ケネディの極秘録音テープが公開される前にも、ケネディの任期中国務省特別補佐官だったレイモンド・ガーソフは、「エクスクムでさえ当時知らなかった」事実を報告している。十月二十二日の演説の直前に、ケネディがアメリカの核部隊の防衛準備態勢を3（デフコン3）に引き上げたことは、かなり前から知られていた。アメリカのミサイルの警戒態勢を引き上げるだけでなく、核爆撃機六十六機が常時飛行し、空母八隻が戦艦百八十隻とともにカリブ海に配備された⁽¹²⁸⁾。ガーソフは次のことを明らかにした。二日後の十月二十四日夜、戦略空軍司令官のトーマス・パワー将軍が独断で「ソ連が傍受しても理解できるように平文で、すべての戦略空軍部隊に『デフコン2』態勢に入るよう司令を出した。パワー将軍は単に、ソ連に核の劣等性を思い起こさせる役目を買って出たのだった」⁽¹²⁹⁾。

その日、モスクワからの司令を受けて、ソ連船は「交通遮断」地帯に入る直前の海上でぴたりと動かなくなっていた。これで、少なくとも海上での軍事対立は延期となったと見たケネディはマクナマラ国防長官に、クレムリンの指導者たちに考える時間と政治的余裕を与えるよう強調した。彼がもっとも恐れていたのは、許可なしで攻撃が始まること、または不測の事態で危機が激化することであった。マクナマラは当然のことながら、戦略司令部よりも海軍に注意を集中していた。マクナマラが後に回顧しているように、「どんなにがんばっても、いかに合理的にもものごとをすすめようとしても、決して予測どおりに運んだためしはなかった。」⁽¹³⁰⁾。

パワー将軍の向こう見ずな核脅迫の拡大に加えて、少なくともあと二つの経験が、「マクナマラの法則」を導き出した。すなわち、「偶発事故、誤算、不注意、統制喪失などの可能性があるため、軍事力行使の結果を、高い確実性をもって予測するのは不可能である」⁽¹³¹⁾。

一つ目はいまや伝説的になっているもので、マクナマラと当時の国防次官ロスウェル・ギルパトリックがその詳細を明らかにしている。十月二十四日夜、依然としてカリブ海のアメリカ海軍に平静を保たせる必要に注意を集中していたマクナマラは、自分には「知らされていないことがある」のではないかと疑問をもった。彼はギルパトリックを伴って、伝統的に国防長官を含め文民立ち入り禁止の「海軍の聖域」である、国防総省内の「フラッグ・プロット」海軍司令センターを、前触れなしに訪れた。二人の文民高官が中に入り、当直の士官に質問をしていたところへ、海軍参謀アンダーソン提督が現れ、国防長官の注意をそらそうとした⁽¹³²⁾。

マクナマラは、アメリカの艦船が「封鎖線からはるかに離れた海洋上に一隻」いることを示す海図上の印に気づいていた。アンダーソンにその意味を聞いたマクナマラは、印がソ連潜水艦を監視しているアメリカの艦船を示していると教えられた。マクナマラの質問は尋問に変わった。そのアメリカ艦船はそこで何をしているのか。二つの艦船が対決する可能性はあるのか。交戦が起きた場合、艦船の司令官はどのような指令を出すのか。アンダーソンの答えは反抗的ともいえる

ものだった。「海軍は、ジョン・ポール・ジョーンズ時代以来、封鎖をおこなうにあたって知っていなければならないことはすべて知っています」。マクナマラの尋問は説教に変わった。「目的は、誰かを撃つことではなく、フルシチョフに政治的メッセージを伝えることだ。作戦は可能な限りロシア人に屈辱を与えることを避けるようなやり方ですすめられなければならない。さもないと、フルシチョフは戦争を始めるかもしれない」。ギルパトリックはこのやりとりを、国防総省内部の転機になったできごととして記録している。「そのとき以後、彼らは服従し承認を求めるようになった」⁽¹³³⁾。

アンダーソン提督は、ミサイル危機の後、国防総省から左遷されて駐ポルトガル大使の任に着く前、その印の意味をより正確に記述している。「カリブ海と大西洋における多くのソ連潜水艦の存在は、アメリカ海軍の対潜水艦戦闘部隊が実習訓練をおこない、その技能に熟達し、他国の潜水艦を探知・追跡する能力を誇示する、おそらく第二次世界大戦以来のまたとない機会を提供していた」。事実、危機の間、六隻のソ連潜水艦が「手ひどい目にあわされ」、浮上を余儀なくされた⁽¹³⁴⁾。アンダーソンや彼の文民司令官は知らなかったが、一度などは、こうした「またとない機会」が、ワシントンとモスクワを核兵器の応酬の寸前にまで追い込んだ。

その三日後、対決の緊張が極度に高まった十月二七日、軍を統制できなくなる潜在的な危険性が再び生まれた。ソ連軍がアメリカの侵攻はすでに始まっていると考えてキューバ上空でU2を撃墜したとのニュースに動揺し、しかもトルコからミサイルを撤去せよというクレムリンの要求への対応策に苦慮していたケネディ大統領とエクスコムのところに、別のU2機事件の情報が飛び込んできた。アラスカ基地から飛び立ったU2機が、「大気標本採取飛行」中に不注意からソ連の領空に侵入してしまったのである。ソ連機の追跡は失敗に終わった。大統領は、クレムリン側が「今回の領空侵害を攻撃開始の前触れとは受け取っていないようだ」と判断したが、「どこにでも、命令を理解できない鈍感なやつがいるものだ」と言い添えた。事件を知らされたフルシチョフも、翌日次のように書いている。「アメリカの飛行機が領空に侵入してくれば、核爆撃機だと思われやすく、われわれが決定的な措置に出る可能性もあるというのは事実ではないだろうか」⁽¹³⁵⁾。

ケネディがアメリカ戦闘機領空侵犯の報告を受けた時点で、ケネディもフルシチョフもただひとりのソ連潜水艦船長が勇気を持って核戦争を防止していたことを、知らなかった。後に「冷戦期のもっと危険な瞬間」、ケネディ史家のアーサー・シュレジンジャーが書いているようにおそらくは「人類史上もっとも危険な瞬間」が、十月二十七日の夜に起っていたことが明らかになった。政策立案者や外交官が自分たちの帝國的政治的利益にかなうという条件で核戦争を回避しようとしていたとき、カリブ海で海軍の衝突が起り、マクナマラが認めているような「容易に全面的な核兵器の応酬に拡大しかねなかった」事件に発展したのである⁽¹³⁶⁾。

キューバ沖では、核魚雷で武装し水中を航行していたソ連潜水艦が「キューバ沖をパトロールしていたアメリカ艦船に捕され、砲撃を受けた」。アメリカの駆逐艦の乗組員は、潜水艦への爆雷攻撃で技能を磨いていたが、自分たちが核武装船をなぶりものになっていることには気づいていなかった。爆雷の爆発によって、潜水艦の中は地獄絵の様相を呈し、酸素がなくなって乗組員たちが失神しはじめ、パニックになった。

潜水艦の三人の司令官のうち二人が、核魚雷での報復準備の命令を出した。そのうちのひとり、は、「奴らを吹き飛ばしてやる！われわれは死ぬだろうが、奴ら全員を沈めてやる。われわれは、

わが海軍の顔に泥を塗りはしない」といった。国家安全保障公文書館のトーマス・ブラントンが書いているように、「アルキポフという名の1人の男が世界を救った」。核魚雷の発射を許可するには三人の艦長全員の合意が必要だったが、アルキポフはモスクワからの指令を待つべきだと主張したのだった⁽¹³⁷⁾。

それだけではなかった。一九九二年のハバナ会議で、ソ連のミサイル、兵士、軍事物資などをキューバに輸送する責任者だったアナトリ・I・グリブコフ将軍の発言が、現在もなお決着がついていない、ミサイル危機の最後の数時間に米ソがどれほど核戦争に近づいていたかをめぐる論争に火をつけた。グリブコフの証言では、キューバに置かれていたソ連の軍備には戦術（戦場）核兵器も含まれており、それはアメリカのキューバ侵攻を撃退するためのものだった。ソ連軍司令官プリエフ将軍が、危機の最初から最後までモスクワからの許可なしにこれらの戦術核兵器を使う権限を与えられていたかどうかについて、論争が続いている⁽¹³⁸⁾。

グリブコフによれば、キューバに配備されたR12中距離弾道ミサイル（MRBM）のうち、危機の最後の数日間に燃料注入（十八時間かかる）の準備ができていたのは半数だけであり、標的技術が備わっていたものはひとつもなかった。より射程の長いM14中距離弾道ミサイルは、どれもこの準備段階まですすんでいなかった。しかし、十二基のルナロケットと、十八基のFKR巡航ミサイルは、アメリカの侵攻がおこなわれる可能性が「ありそうな海岸の上陸地点と海洋の接近点を標的として配備されていた」⁽¹³⁹⁾。

グリブコフはさらに次のことを明らかにした。一九六二年の七月、プリエフがキューバへ向かう準備をしていたとき、フルシチョフはソ連国防相の同席のもとで、「イサ・プリエフ将軍に、戦闘が厳しくなりモスクワとの連絡が取れなくなった時、将軍が独断で戦場兵器と核弾薬を使用する権限をじきじきに与えた」。この権限は、アメリカ本土に到達可能な中距離ミサイルの使用まで拡大されなかった。十月初旬キューバのソ連軍に合流したグリブコフ将軍は、プリエフにこれらの指令を再度確認している。

十月中旬、自分の秘密の策略が察知され、ソ連ミサイルの最初の輸送が「空からの一撃で破壊されて」しまうのではないかと恐れたフルシチョフは、プリエフへの指令を変更した。将軍は「STATSENKOの手段とBELOBORODOVの全船荷を除くソ連の全戦力を挙げて、キューバ軍とともに戦闘態勢を整え、敵軍を撃退するための緊急措置を講じること」とされた。「STATSENKOの手段」とは、アメリカ本土に到達可能な中距離弾道ミサイル、「BELOBORODOVの船荷」とは、ルナロケット、巡航ミサイル、核地雷四基、イリュージン28搭載の原爆のことだった。戦争の差し迫った危険に直面して、フルシチョフは核戦争の可能性を減らすために、十分「理性的」だった⁽¹⁴⁰⁾。

しかし、プリエフへの指令の変更は、アメリカがキューバ侵攻（ケネディが示唆した侵攻は、十月二十七日のフルシチョフ宛の手紙では、かなりの現実性を持っていた）を実行した場合に、キューバのソ連軍が戦術核兵器を使用する可能性を排除してはいなかった。グリブコフは、アメリカの空爆で、キューバにあるすべての中距離弾道ミサイル基地とイリュージン爆撃機は全滅しただろうと、それ以来ずっと主張している。グリブコフは、アメリカの爆撃機は、「キューバ島の通信を遮断してモスクワとの連絡を遮断し、ソ連とキューバの防衛部隊を粉砕しただろう」と後に書いている。彼は戦術核兵器の核弾頭が発見され破壊されたかどうかについては、疑問をも

っていた。なぜなら防衛部隊はキューバ革命の精神に鼓舞され、「敵を完全に破壊するまで独自で闘うように」命令されていたからである。そのためグリブコフは、「必死になったソ連防衛軍は、上からの命令があろうとなかろうと」ルナロケット、あるいはもっと強力な巡航ミサイルを「発射したにちがいない」と主張している。「もしロケットがアメリカの部隊や艦船に命中していたなら、それははたしてキューバ危機における最後の砲撃になったのか、それとも世界戦争の最初の砲撃になったのだろうか」と、グリブコフは問うた⁽¹⁴¹⁾。

ルナロケットあるいは巡航ミサイルのいずれかでも発射されていたら、アメリカ軍は戦争拡大の道すばやく進んでいったらう。アメリカの侵攻計画は、戦術核兵器が「すぐに使用可能な状態におかれ」、「アメリカ軍にたいする核兵器の使用への報復として」**使用されること**としていた⁽¹⁴²⁾。

一九九二年の会議では、危機の激化とフルシチョフのミサイル撤去の決定に、カストロがどれだけ関わっていたかも、詳しく議論された。十月二七日、危機が激化するなか、キューバ対空部隊はアメリカの偵察機を撃墜するよう命令された。キューバ対空部隊が射撃を始めた時点で、ソ連の将校たちは、「戦闘がはじまり、ソ連軍にたいするこれまでの制約は取り払われた」と考えた。ソ連の射手が発射した地対空ミサイルでU2偵察機が撃墜され、パイロットが死亡した。エクスクムの最初の判断は、アメリカにはキューバへの空爆しか選択肢は残っていないというものだった。ケネディは賢明にも、熱に浮かされ戦争へとなだれこんでいくことを拒否した。

さらに穏やかでない事実は、侵攻が差し迫るなか、アメリカが攻撃を開始した場合には先制攻撃をおこなうよう、カストロがフルシチョフに圧力をかけていたという事実である。カストロはこう回想している。

われわれは、キューバが侵攻されたら核戦争が起こるといふ仮定からスタートした。われわれはそれを信じていた。……キューバの誰もが、自分たちが消滅するという代償を支払わざるをえない運命をそのまま受け入れるつもりだった。祖国が占領される前、いや完全に占領されるその前に、祖国を守って死ぬ覚悟はできていた。**侵攻を受けていたら、私は戦術核兵器の使用に合意していただろう。戦術核兵器を持っていればと思った。持っていればどんなによかったらう**⁽¹⁴³⁾。

フルシチョフは回顧録のなかで、カストロが実際にミサイル危機の最後の数日間に、先制攻撃をおこなうよう強くもとめていたことを記録している。十月二十六日付けのフルシチョフへの手紙で、カストロは次のように提言した。

侵略は、二十四時間ないし七十二時間後に迫っています。帝国主義者の侵略がキューバの占領を目的としているのであれば、その攻撃的政策は人類にとって大きな脅威であります。したがって、侵攻がおこなわれた場合、ソ連は帝国主義者がキューバに第一撃を与えるような状況を決して容認してはなりません。帝国主義者の侵略性は非常に危険であり、実際に彼らが、国際法と道義に反してキューバを侵略するという暴挙にでることがあれば、**そのときこそ、断固とした正当防衛の行為によって、この危険を永久になくすときです。**このような解決策がいかに

に過酷で厳しいものであろうとも、他に方法はないのです⁽¹⁴⁴⁾。

これは、フルシチョフが対決を終わらせる決定を下したいきさつに関する、オレグ・トロヤノフスキーの話を理解する助けとなる。危機の最中フルシチョフからケネディへの書簡を起草するにあたって主要な役割を果たしたトロヤノフスキーは、ハバナ会議で次のように報告した。フルシチョフは、ケネディが十月二十八日にアメリカ国民への演説を予定していると知らされた。「誰もが、これでケネディは戦争を宣言し、攻撃を開始するつもりだと思った。フルシチョフは急きょ、キューバからのソ連ミサイル撤去に同意することをケネディに伝えるメッセージを起草した。彼はフィデル・カストロには知らせも相談もしなかった。こうして彼は、カストロにはおかまいなしに、自分だけ窮地から脱したのだった」⁽¹⁴⁵⁾。

危機が残したもの

帝国の威信と権力および自分たち自身の政治キャリアを守るために人類最大の危機を招いたケネディとフルシチョフであったが、時において、多くの顧問のだれよりも慎重さと創意を發揮した。キューバへの即時侵攻への圧力をおさえながら、ケネディは封鎖を選択した。危機に関するはじめてのフルシチョフへの秘密の通信で、ケネディは交渉による危機解決の意志があることを示唆した。時として圧倒的な核の優位に陶醉することもあったが、ケネディもマクナマラも、ソ連ミサイルが一基でも二基でもアメリカの都市に到達するようなことがあれば、アメリカはピュロスの勝利（訳注—非常な犠牲を払って得た、引き合わない勝利のこと）を得るだろうと、適切な懸念を持った。トルコからの米ミサイルの撤去について、はじめはありえないものと判断し危機を長引かせ激化させてしまったが、ケネディは後にそれについて極秘の交渉をおこなった⁽¹⁴⁶⁾。キューバのソ連戦略ミサイルが察知されるとただちに、フルシチョフは、キューバにある依然として秘密の、すでに使用可能な戦術核兵器に関する完全な指揮統制を回復するための手だてを取った。また、封鎖への報復として西ベルリンに同様の締めつけをおこなうという提言も、拒否した。そして危機の最後の数時間、通信の遅れによって極秘の外交プロセスが壊されるおそれが生じたとき、ケネディとフルシチョフは公の場に出て、それぞれが出した条件やその受諾について国営ラジオネットワークを通じて流した。

キューバミサイル危機の終結にたいするアメリカ国民の最初の反応は、核戦争が回避されたという安堵感と、ソ連との対決に勝利した大統領への称賛であった。危機が生み出した恐怖は、今後危機が起こったときの通信を円滑にするための米ソ首脳電話「ホットライン」の開設の発表と、大気圏および海洋での核実験を禁止する部分的核実験禁止条約交渉によって、多少沈静化された。こうした措置は、超大国が核の瀬戸際政策を放棄したことを示すのに大いに役立ったが、その一方でこの危機は広島と長崎のような、あるいはそれより恐ろしい惨事が将来世界に起こりうるという、逃れられない現実をつきつけた。

ミサイル危機での誤算もあってフルシチョフは一九六四年に失脚したが、彼の核ばくちは二つの目的のうちひとつを達成した。キューバを侵攻しないとのケネディの言質は実行され、キュー

バ革命は守られた。予定どおりジュピターミサイルもトルコから撤去されたが、ケネディとアメリカ議会が知っていたように、ミサイルは時代遅れになっていたので、たいした影響はなかった⁽¹⁴⁷⁾。

危機は少なくとも、三つの永続的でとりわけ危険な遺産を残した。一つは、しごく当然ながら、ソ連はアメリカの核の優勢と自分たちの第二級としての地位を受け入れなかった。代わりに、ソ連指導部は、必要なあらゆる手段を講じて、自分たちの核の劣勢を挽回する道を選んだ。一九七〇年代はじめには、ソ連はアメリカとほぼ肩を並べ、仮に米ソ間で核戦争が起これば、それが目的でないにせよ、相互確証破壊をもたらすことが確実に became。これがかえって、アメリカの先制攻撃力回復の努力に拍車をかけることになった。

二つ目に、いずれの核大国も軍を完全に統制できなかったことと、カストロの危機の最中の行動は、核大国も敵国もゲームの「理性的」ルールにしたがって対応するものだとはいずれも期待できないことを示した。そのような無分別は、カストロの野望や、あるいはケネディ、フルシチョフおよび彼らの側近グループの政治的戦略的打算に限られない。彼らの覇権的権力と威信を強化するために、アメリカとソ連の上級指導部はすすんで、破滅的な核戦争の危険を冒し数億人の命を危険にさらそうとしていた。ジョンソン副大統領、J・ウィリアム・フルブライト上院議員など後にベトナム時代のハト派として知られるようになる人々は、ケネディに「封鎖は最悪の選択肢」であると進言し、「可能な限り早期の」キューバ「全面侵攻」をもとめた。リチャード・ラッセル上院議員はフルブライトに同調し、大統領に核戦争の危険を冒すよう強くもとめた。「偉大なる世界大国としての地位を保持するつもりなら、われわれは、どこかで、いつかチャンスをとらえなければならないのだ」。そしてウィーラー将軍は、参謀本部議長らの考えをうったえた。「私は、自分が生きているうちに、戦争を始めたいと思う日が来ようとは夢にも思わなかった」。モスクワでも、フルシチョフが非理性的な対応を迫られていた。ケネディの封鎖発表を受けて、ドブレニン大使が報復としてベルリンの再封鎖をもとめたのだ⁽¹⁴⁸⁾。

最後のひとつは、アメリカ国民の見方であり、多くの政治家や戦略分析家たちが学んだ教訓だが、アメリカの核脅迫と段階的戦争拡大による支配の実行が、ソ連に譲歩を強いたということである。こうして、アメリカの核兵器先制攻撃への傾倒と、核兵器先制使用の実践、準備および脅迫が強化されることになったのである。